

昭和60年度

都倫研紀要

第24集

東京都高等学校倫理・社会研究会



生徒から出発する研究を

会長 酒井俊郎

都倫研の分科会の開会は午後6時である。といってもこの時間に間に合う人は2～3名である。6時半くらいまでに5～6名が集まって勉強が始まる。7時半ぐらいになっても駆けつける人があって大体10名前後の参加者となる。取り上げるテキストはさまざまであって、最近では、「イエス伝」(ルナン)、「近世における我の自覚史」(朝永三十郎)などが取り上げられており、次回は「プロテスタンティズムと資本主義の精神」(マックス・ウェーバー)をめぐる話し合うことになっている。

チューターは、数枚から時には10数枚に及びプリントを用意して熱心に発表し、それをめぐって活発な話し合いが9時過ぎまで続く。その熱心さにはまことに敬服する。そして、これが都倫研の伝統だとなしみじみ思う。都倫研が発足してから20余年間、一貫してこのような勉強会が続いているのである。「年1回大会を開くだけの研究会にはしたくない。お互いがほんとうに勉強し合える研究会にしたい。」ということでこの会を設立した先輩の初志が、今も脈々と受けつがれていることは、ほんとうにありがたいことだと思う。

勉強会が終りに近づくころになると、「きょうのこの勉強の成果をどのようにしたら生徒に伝えることができるだろうか」という話になる。そして、今の高校生の生活や意識の実態をどう捉え、どう評価したらよいかということをめぐるさまざまな意見が述べられる。

今の高校生を、いわば古典的な青年期論の立場で理解できるのかどうか。高校生の意識や行動が変わったというが、いったいどこがどのように変わったのか。変わったとすれば今後どのようなアプローチをしていけばよいのか、等々、真剣な意見が次々に展開されて時の経つのを忘れてしまう。

確かにこの問題こそが最も重要な課題であると思う。生徒が、何を考え、何を求め、何を願っているかを理解することなしに、適切な指導をすることはできない。生徒の生活や意識の実態から出発し、生徒と共に考え共に語り合い、生徒と共に自らの考え、生き方を求めるという在り方を基本にしたいと思う。生徒の実態に迫る調査・研究を、もっと広い立場からもっと深めたいと思うがどうであろうか。

目 次

卷 頭 言		1
I 研究主題と研究体制		4
紀要の執筆要項		6
II 研究会活動の概要		7
III 研究例会報告		
総 会		
研究発表 考える力生きる力を育てるために	江戸川高校 泉谷まさ	10
講 演 学校教育と正論	千葉大学教授 京極純一	12
第1回研究例会		
公開授業 他者との関係を考える	八王子東高校 井上 勝	15
研究発表 生徒の「気」をめぐって	田無工業高校 辻勇一郎	16
講 演 「身」からの発想	明治大学教授 市川 浩	19
第2回研究例会		
公開授業 高校生にとっての労働問題	荒川工業高校 富塚 昇	22
研究発表 事例導入による「青年探究」の学習	水元高校 大野精一	23
講 演 現代におけるテクノロジー	文化人類学の視点から 東京外語大助教 川田順三	27
第4回研究例会		
公開授業 仏教の思想について	駒場高校 細谷 齊	29
研究発表 「イエス」をいかに教えるか	正則高校 紺野義継	30
講 演 都立高校私の歩んだ道	蒲田高校校長 鮎沢真澄	34
教育雑感	国分寺高校校長 井原茂幸	35
倫理・社会と学校経営	富士高校校長 道広史行	36
IV 研究報告		
〔第1分科会……現代社会の基本的な問題を探求させる指導方法の研究〕		
研究経過報告	清瀬東高校 上村 肇	37
マンガから見る現代高校生の心象風景		
あだち亮『タッチ』の世界を手がかりに	東村山高校 新井 明	39

〔第2分科会…現代に生きるための倫理的自覚を深める指導方法の研究〕	
研究経過報告	44
〔第3分科会…文献・資料による指導内容の研究〕	
研究経過報告	八王子東高校 井上 勝… 45
必修倫理の目指すもの	八王子東高校 井上 勝… 48
卒業生からの手紙 — 現代社会（青年期）の導入の資料に使う —	
	江北高校 宮崎宏一… 52
V 特集“現代社会私の試み”	
B・タウトの嫌ったもの	竹台高校 斉藤 規… 57
林・竹二	秋川高校 水谷禎憲… 61
現代社会私の試み	片倉高校 増渕達夫… 65
情報社会の問題 — 過熱する事件報道を対象にした授業実践 —	
	千歳丘高校 古澤英樹… 68
現代社会私の試み	四谷商業高校 影山 洋… 72
VI 事務局だより	
	75
編集後記	77
東京都高等学校倫理・社会研究会規約	78

I 研究主題と研究体制および 紀要の編集方法

研究部長 三宅幸夫（砧工業）
研究副部長 幸田雅夫（玉川聖学院）
水谷禎憲（秋川）
富塚 昇（荒川工業）

〔本年度の研究主題〕

現代に生きる課題を探究させる指導方法の研究

〔研究主題設定の趣旨〕

本年度は「現代社会」が新科目としておかれてから4年目を迎えることになった。過去3年間、当研究会においても年間指導計画案や授業展開例などが数多く発表され、さまざまな工夫や新しい試みが生み出されてきた。その中で、「現代社会」という科目の理念や指導内容などについては、しだいに定着がはかられてきた。

ところで、「現代社会」の指導内容のうち「現代社会の基本的な問題」では現代に生きる課題を探究させ、「現代社会と人間の生き方」では現代の課題に即した生き方を考えさせる指導方法がより一層求められている。すなわち、生き方の探究という一貫した視点で指導内容を構成することが特に必要とされている。

そこで、本年度は人間の生き方を基本にすえて、現代の社会が直面しているさまざまな課題を探究させる指導のあり方を研究していくことにしたい。

以上のような趣旨にもとづいて、上記研究主題を設定した。

尚、研究を進めるうえで、以下の3点に重点をおく。

- (1) 「現代社会」の指導内容の理解も進み、今後は教材化や授業展開の工夫および適切な評価のあり方に重点をおく。
- (2) 現代の社会がかかえている諸問題について考えを深め、人間がよりよく生きるとはどういうことか、倫理的な角度から具体的な指導のあり方を研究する。
- (3) 生徒の問題意識や関心および学校の実態を考慮した指導方法について研究を進める。

〔研究体制〕

以上の研究主題・研究の方法をふまえたうえで、本年度は次の3つの分科会を設

けることにした。

第一分科会 現代社会の基本的な問題を探究させる指導方法の研究

現代に生きる生徒が直面する問題や課題の意味を政治・経済など現代の社会のあり方とかかわらして幅広い角度から考察し、生徒の判断力や思考力を養うためにはどうしたらよいか、その具体的な授業展開の方法を研究する。

第二分科会 現代に生きるための倫理的自覚を深める指導方法の研究

青年期にあたる生徒に対して、人間の生き方の課題をどのように指導していくべきか、「現代社会」のねらいにふさわしい指導内容・指導方法などについて具体的な実践例をあげながら研究を深める。

第三分科会 文献・資料による指導内容の研究

「現代社会」の指導内容が多領域にわたっているため、幅広い教材研究が必要とされる。そこで、参考図書や文献を通して学習を深め、授業に生かすための研究をおこなう。

本年度の紀要は、下記の〔 1 〕〔 2 〕を基本として編集したいと思っております、〔 1 〕〔 2 〕のいずれかを選んで御執筆願います。

〔 1 〕 個人研究レポート

- (1) 本年度の研究主題は「現代に生きる課題を探究させる指導方法の研究」です。「現代社会」や「倫理」における、教材選択のこと、年間指導計画、または授業を展開するうえでの工夫・方法などについてまとめた研究報告やレポートの御執筆をお願いいたします。
- (2) 御執筆の際は、見出し・項目などをたてて、できるだけわかりやすくしていただければ幸いです。
- (3) 枚数 同封の原稿用紙（37字×31行の枠内）で2～4枚をメドに御執筆下さい。

〔 2 〕 特集 「現代社会」私の試み

- (1) 高校生が多様化していく中で、現代の社会がかかえている諸問題について、どのように考えを深め、どのような生き方をしたらよいかが問題となります。先生方の授業実践をとおしての構想・視点・評価などを中心に、気がつかったことを自由な形式で御執筆下さい。

(2) 体裁・枚数については〔1〕と同様です。

締切 昭和61年1月15日

Ⅱ 60年度の全般的活動概要

〔第1回〕 5月28日(火) 総会並びに研究発表大会
於新宿高校朝陽会館

1) 総 会

会長挨拶	会 長	酒井俊郎氏
昭和59年度会務報告	教育庁指導主事	蛭田政弘氏
昭和59年度決算報告並びに監査報告		同
昭和60年度役員改選並びに事務局人事	都立豊島高校	葦名次夫氏
昭和60年度事業計画審議		同
昭和60年度研究計画審議	都立砧工業高校	三宅幸夫氏
昭和60年度予算案審議	都立豊島高校	葦名次夫氏

2) 研究発表並びに研究協議

「昭和59年度の研究活動の総括」	都立東高校	小嶋 孝氏
「考える力、生きる力を育てるために」	都立江戸川高校	泉谷まさ氏

3) 分科会の構成・世話人選出

4) 講 演

「わが国の学校教育における〈正論〉」	東大名誉教授	京極純一氏
--------------------	--------	-------

〔第2回〕 6月21日(金) 第1回例会 於都立八王子東高校

1) 公開授業

「他者との関係を考える……キリスト教」	都立八王子東高校	井上 勝氏
---------------------	----------	-------

2) 研究発表

「生徒の〈気〉をめぐって」	都立田無工業高校	辻勇一郎氏
---------------	----------	-------

3) 講 演

「〈身〉からの発想」	明治大学教授	市川 浩氏
------------	--------	-------

〔第3回〕 10月25日(金) 第2回例会 於都立荒川工業高校

1) 公開授業

「高校生にとっての労働問題」	都立荒川工業高校	富塚 昇氏
----------------	----------	-------

2) 研究発表

「事例導入による〈青年と自己探究〉の学習」 都立水元高校 大野精一氏

3) 講演

「文化の中の技術……アフリカの伝統技術をめぐって」

東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所教授 川田順造氏

〔第4回〕全倫研秋季大会と共催

11月15日(金)・16日(土) 於玉川聖学院

1) 全体協議

「現代の課題をどうとらえ、どう高校生を指導するか」

問題提起

「生徒が自主的に取り組む社会科教材」 埼玉県立春日部高校 宮内正勝氏

「生涯、自ら学ぶ意欲と方法を学ばせる」 都立大森東高校 木村正雄氏

2) 公開授業

1年「現代社会」グループ研究

「汚れを落とす磨法の石(石鹸にみる生活文化)」 玉川聖学院 幸田雅夫氏

「子供と遊び」 同 水口 洋氏

「絹と絹織物」 同 飯島和俊氏

3) 分科会協議

第1分科会

「現代社会の課題を探究させる授業展開 — 現代社会の諸問題を自己の生きる課題としてどうとらえさせるか —」

問題提起

「高校生からみた政治家像」 宮城県立名取北高校 鈴木敏雄氏

「現代の課題を生徒とともに考える授業展開例」 都立北多摩高校 吉野 聡氏

第2分科会

「生き方を考えさせ、倫理的自覚を深める授業展開 — 生徒が積極的に自己探究を深める授業をどう工夫するか —」

問題提起

「地域社会に生きる倫理」 長野県立軽井沢高校 市原 潤氏

「全寮制高校と倫理 — 生活指導を手がかりに」 都立秋川高校 水谷禎憲氏

第3分科会

「現代に生きる高校生の課題をどうとらえ、どう指導するか——生徒自身の課題に応え、生徒の立場に立つ授業とは何か——」

問題提起

「高校放送コンテストにみる高校生の課題」 群馬・高崎商業高校 高橋 孝一氏

「心と身体の健康——現状とその対応——」 帝京高校 近藤 卓氏

3) 記念講演

「現代にとって宗教とは——仏教とキリスト教の接点から」

東京工業大学教授 八木誠一氏

4) 臨地見学

「現代社会の諸課題を経済・環境・マスコミを通して考える」

東京証券取引所——東京都環境科学研究所——日本経済新聞社

〔第5回〕 2月7日(金) 第3回例会 於都立駒場高校

1) 公開授業

「仏陀の生涯とその思想」 都立駒場高校 細谷 齊氏

2) 研究発表

「ルナンの<イエス伝>から」 正則高校 紺野義継氏

3) 講演

「都立高校 私の歩いた道」 都立蒲田高校長 鮎沢真澄氏

「教育雑感」 都立国分寺高校長 井原茂幸氏

「<倫理社会>と学校経営」 都立富士高校長 道広史行氏

考える力、生きる力を育てるために — 私の授業報告 —

都立江戸川高校 泉谷まさ

四年間の定時制勤務の後に赴任した江戸川高校で私は教師として真の力量を問われる30代を過ぎた。それはまた、幼ない二児の母親として育児に奮闘する日々でもあり、その母親としての経験が教師としての私にさまざまな影響を及ぼしたように思う。私のつたない体験を通して、「現代社会」の授業に対する私見を述べたい。

中学校での進路指導が徹底するなかで、江戸川高校には中学でのいわゆる中間層（勉強にはさほど意欲的ではないが、ある程度上位の成績であり、生活上もとくに問題のない者）が多く入学してくる。下町気質であろうか、生徒は一般的には明るく人なつこい。しかし御多分にもれず、生徒の幼稚化、学習意欲の低下は顕著である。言語表現力の乏しさ、根気・集中力のなさ、社会的関心の薄弱さ、社会性・協調性の不十分さ、自己認識の甘さ等々、学ぶ力、考える力の低下は、彼らの生活や人間性を侵食し、生きる力を弱めているように思えてならない。とくに、最近3、4年、生徒は“手がかかる”ようになった。それゆえ、いかに無駄を省き、必要最少限度の内容を理解させるかということに私は腐心した。かって生徒の自発的学習を引き出すことに一応成果をあげたグループ研究・発表授業も、次第に“労多く実り少ない”ように感じられて断念した。教師として経験を積むにしたいが、授業展開がソツなくなったのに反比例して、生徒の生活実感に結びつかない、どこか生徒とかみあわない授業が多くなり、生徒の力をひき出すどころか逆に社会科嫌いを増やした。生徒も不満、私も不満、私の授業は暗礁に乗りあげた。

この頃、小学生であるわが子の授業参観、PTA活動や学童保育クラブの父母会活動などを通して、母親の立場からも教育問題を考える機会が多くなった。わが子は決して「優等生」ではなく、とくに息子はよく言えば“個性的”だが、ルール無視の「はみ出しっ子」であり、教師からすれば「おもしろいけれど、あつかいにくい」。親としては、勉強、友人、生活習慣すべてにわたって気がもめた。息子は、小さい時から乗物が好きで、日曜日には父親と都バスを乗り継いで出かけ、終点まで行って別の路線で戻ってくる小さな「巡検」を続けていた。いつとはなしに都内の国電、地下鉄、バスの路線、道路、車窓から眺めた町の様子などが彼の脳裏に焼きついたらしい。四年生で地域（自分の住む品川区・東京都）の勉強が始まると、日頃授業に集中できず勉強もほどほどの彼が見違えるばかりの取組みを見せた。小

学校の近くを流れる目黒川について調べるにあたっては、上流の世田谷から河口の品川運河まで、休日はもちろん放課後もカメラをもって歩けるだけ歩いてしまった。戦前の古い地図と現在の地図をつきあわせ、自分の撮った写真を供えるというようになかなかの研究ぶり、実際に自らの目や足を使っているから授業の際の説明も堂に入ったものだったと先生から大いにほめられた。彼はすっかり自信をつけた。

私は息子が「知りたい、見たい」の一心で遠くまで出かけてしまうことにハラハラしながら、また貴重な休日を息子の「巡検」につきあわされるのをぼやきながら、その姿に「学ぶ」ことの原点を見る思いだった。私には「汚染された目黒川」ではないが、息子にとっては「自分たちの町の川」であり「最も身近な川」であって大人の想像をはるかに超えて興味も愛着も持っているのだ。目黒川は彼にとっては自分の生活に生きているものなのだ。息子は「自ら学ぶ」実感をもったようだ。

高校生も同じではないのか、授業内容が生徒の生活実感に結びつかなければ彼らが興味を持つはずはない。その点彼らの嗅覚は鋭敏である。受験のためにある一定量の知識が要求される。知識量にとられれば、社会科は多くの生徒が思いこむように「暗記科目」に止まる。そこから生徒が考える力、ひいては生きる力を育てることは困難である。『現代社会』の学習内容は多岐にわたる。高一の生徒にとって現代社会の全体像をとらえることは難しい。しかしそれは私たちの生活、生き方に直結している。教師であると同時に一人の母親、生活者としての日々の体験から生徒に何かを提示できないか。私はそう考えて自己の生活体験を実例として授業の展開を試みた。例えば、環境問題では「水俣」に取組むが、水質汚濁に関連して“わが家の台所用洗剤の話”，高齢化社会問題では，“わが老親をめぐる現実”，人権一男女の平等問題では“祖母・母と私の生き方”“わが家の共働き”，国際平和問題では“修学旅行で知りあった語り部の人々”財政一税金問題では“わが家の確定申告”等々である。これらを単なる体験談に終わらせないために、法律、経済、政治とどう関わるかを図示し、解説を試みる。いささか気恥しくもあるのだが、生活者として「語りかける」ことが、私と生徒とを結びつけ、そこから新たな学習の展開が期待できるようになった。身近かな日常体験の現実と社会の政治や経済の複雑なしくみとの関わりを理解できるようになった。あるいは自分自身の日常体験を検証しようと試みる生徒が少しずつだが増えて来たように思う。学び方がつかめ、考えようと試みる者は、知識がいまだ少々物足りなくても「現代社会」を生きる力を次第につけてくるのではないか。そう考えて授業に臨むこの頃である。

学校教育と「正論」

千葉大学教授 京 極 純 一

1. 教育と学校

法令的ではなく実質的に見ると、教師には「子供が好き」「教えることが好き」「飽きがこない」という三つの適性が必要である。これは、本人の努力ではなく、生まれつき忍耐力が強く、相手の事情を的確にとらえる判断力や、公平の感覚も必要である。これらは少数の人にしかない天分であり、学校体系という巨大な官僚機構はこれを持たない多くの人々によって動いているという現実認識が成り立っている。

次に、教育は教わる側の自発性に全面的に依存している。自動車教習所のように目的が明確で実用主義にもとづく場合と違って、自発性を呼びさますために何の役に立つのかをわからせなければならないのが学校教育であるが、生徒は未だ生活者ではないので、社会的圧力に支えられた教師の権威に頼ることになり、聖職イメージもここから出てくる。

こうして考えると、学校は元来教育とうまく両立せず、卒業証書を分配するしくみとしては経済的だが、教育としては無理があるのではないか、ということになる。

2. 学校教育の構造

このような学校教育の構造は、3つの要因から成っている。第一の要因は就学強制である。明治以来義務教育は文明開化の手段とされ、立身出世の階梯となり、現代ではヒラ社員になるだけでも大学を出なければならなくなった。また、本来無償であるはずの義務教育にもかなりの金がかかり、保護者への経済的負担の強制もともなう。実質的な就学強制の正統性原理は、立身出世の階梯という説明と、民主主義の練習所という説明の二つから成立する。前者には、三つの系(コロラリー)がある。第一に画一主義。これは優勝劣敗の選別を実現し、学校増設等をめぐり集票をねらう政党政治が参加してくる。第二に教育の社会政策風の考え方。政府が立身出世の階梯を下さるという考え方から、国公立を上に見る見方や、逆に金持ちの私立・貧乏人の公立という見方などが生まれる。第三に、実用主義。就職に有利な最終学歴を得るために、進学率の高さを誇り、あるいは入試科目に左右されて負担軽減の声にあおられ、学力水準の低下を招いたりする。また後者は、換言すれば学園共和国と言えるものだが、外の本物の政治の世界の草刈場になったり、学力重視の風潮の中で棚上げされ、前者の正統原理のみが生き残ることになる。

第二の要因は、官僚機構にある。2500万人を超える教師と生徒が編成されて運営され得るのは官僚機構だからこそで、また教師の聖職イメージは自己規律をもたらすので維持コストを安くする。しかし、敗戦後このイメージは崩れ「三ト」教師という生活力を示すイメージすら生まれる。教師は聖職イメージから解放され、気楽になるが、生徒に対してその権威を主張できず、学力や人間的魅力による権威も多くの教師には期待できず、教育効果の低下、秩序維持の困難をもたらす。

第三の要因は、職業独占と閉鎖性である。部外者を排除し、秘密を守るのは、業界としての常識であり、学校に限ったことではないが、外部の者は一切口を出すなという学校内の常識が生まれる。PTAとの摩擦が生じて、子供を人質にとられているのでPTAは退却する。しかし最近では訴訟も多々おこされるし、校内秩序の維持も困難になってきた。内政干渉を排除することと、自治がうまく進行することとは別問題である。また、独占を正当化するにはサービスの質的水準の維持が不可欠であるが、社会の進歩の速さは学校の保蔵する知識の先進性による裏づけも困難になってくる。このためには個々の教師が専門性を高めていかざるを得ず、何の知的関心もない生徒を前に「知識の切売り」に汗を流す絶望的場面になる。一人の人間としての教師と一人の人間としての生徒に接するという古典的場面がへり、様々な問題を生む理由になる。

3. 正論の場面

ここからどういう正論が出るか。第一に学校、第二に実社会、第三に当事者である教師の側から出てくる。

第一に、学校からの正論である。その一つは平等正論である。学園共和国の正統性に支えられ、無競争にして平等に扱うようにする。「みんな仲よく」が好ましい。しかしこの結果、子供たちは全員同じカリキュラムで評定され、優勝劣敗が明確になるので、挫折の事実をオブラートでつつもうとする。もっとも明確なのが入試であるから、全員進学が求められる。そのうえは全員卒業が望ましいのだが、現実には高校中退者が非常に多い。また全員卒業という成果の平等があっても、全員に平等に学力がついているわけではない。そのための能力別学習は平等正論に否定される。平等正論は一方で相違なり差を明白につくり出し、他方でそれをせせと包みかくす。そしてこの方法は、生徒・教師に自尊心の擁護という点で一貫する。

二つ目は純真正論である。子供は悪に染まない純真な存在で、無限の教育可能性、自発生・自主性をもつ。だから、例えば外国語で苦しいドリルをくり返すことはな

いとなれば、教師も生徒も楽で、当然語学力は身につかない。また、どんなに問題を起こしても処罰などあってはならない。しかし外からの汚染から守るために、詳細な生活規則ができてくる。

三つ目は、聖域正論である。悪人はなく悪の汚染もないのだから、外部勢力や実社会の風当たりを断固排除しようとする。教師や生徒の基本的人権が守られないのではないかと反論を受けると、この聖域に入るときにその一部は放棄されているとする議論や、学校は憲法の及ばない独立国家だという議論にもなる。世間から「臭いものに蓋」をしているだけだと見られると、先生方の権威が落ち、尊敬されなくなる。

第二に、実社会からの正論がある。経費を負担する立場から、実用主義、能率を軸とする正論である。ひとつは学力正論である。選挙の政治の下で平等正論が勝利して学歴インフレが進むうちに、学力正論は地下にもぐり、受験産業が栄え、企業はアメリカのビジネススクールに社員を送る。

ふたつ目は競争正論である。進学競争の成果を物差しに学校を評価する、世間常識を学校にそのまま当てはめた、身も蓋もない議論だが、新聞で批判しながら週刊誌で合格者特集をくむ現実があり、学校も進学の成果を満足の源泉にする。潜在能力の平等信仰によれば、結果の差は努力の差であるから、ときには「しごき」も生じる。

みっつ目は管理正論である。周囲の実社会に迷惑をかけぬようキチンと管理せよという正論で、盗難や暴力やいじめから、学校行事の騒音まで管理せよということになるが、このためには学校は実に人手不足である。純真正論や聖域正論にしばし目をつむらないと維持できないこともある。

このように、学校の平等正論、純真正論、聖域正論と、実社会の学力正論、競争正論、管理正論は対立し、衝突する。これに生活者としての教師の立場から唱えられる労働者正論、あるいは組合正論が加わるのである。学校教育をめぐる正論の状況は、このようなものである。

(記録・文責 田園調布高 和田倫明)

記者註：先生の御講演の内容は、東京大学出版会「UP」第156～157号に掲載されております。詳細はぜひそちらを御覧いただければと思います。

〔第1回研究例会 公開授業〕

他者との関係を考える

都立八王子東高校 井上 勝

1985年度の第1回研究例会を6月21日に八王子東高校で開催していただいた。

本校は10年前「高校らしい高校を作ろう」をスローガンに開設されたが、授業では各教科が教科に固有の方法で青年期に在る生徒の成長に役立つ様な工夫を行っている。倫理は2年生で必修で実施している。公開授業は「他者との関係を考える」というテーマでキリスト教の中のイエスの思想について見ていただいた。上記の様な事情の為、授業はイエスの直面した現実の人間関係を考察することを通して自分達の現実の人間関係を省察すること、具体的にはイエスの思想によって友人関係とその裏面である悪の存在について考えることを目標としている。この様な目標に向けて授業を展開する時、教科書の様なヒューマニスティックなイエス像とは異なるイエス像の構築が必要となってくる。公開授業にあたってはこの点の説明の機会がない為、授業の意図が十分ご理解いただけるか否か心配であった。倫理を必修で実施すること、イエス像の転換などについての事情は本紀要の拙稿「必修倫理の目指すもの」をご検討いただきたいと思います。

事務局からは公開授業と共に開校以来の様々な試みについても報告して欲しいとの要請があった。本校では授業を中心として不得意科目については英数国の基礎講座を、得意科目については全教科について特別講座を実施してきた。基礎講座は一昨年廃止されたが、特別講座は現在も存続している。特別講座は1単位で、教科の枠にとらわれずに担当教員が得意とするテーマで開講し、生徒は17~8の講座の中から選んで学ぶというもので、1講座の平均受講者は20名程である。かつては読書会形式でS・ヴェーユ『抑圧と自由』、プラトン『国家』などを読んだ。毎年生徒会役員や関心の高い生徒が10名程集まり、全講座中最も充実したものであった。しかし、近年生徒の思想への関心が乏しくなり、読書会形式が難しくなった為、集った生徒が自分達でテーマ、方法を決めるという、エンカウンターグループの様な形式を模索している。特別講座全体も、又、曲り角に在る様である。

最後に、開催に当り様々な配慮をいただいた事務局の先生方、又、多摩という遠隔の地での例会にもかかわらず参加下さった先生方に厚くお礼を申し上げます。

生徒の「気」をめぐる－「気づき」と授業－

都立田無工業高校 辻 勇一郎

(1) はじめに－「気」という観点

「気」とはなにか。古代中国思想上に発生したこの言葉は、現在、さまざまな意味をもつ。それらを今、簡単に分類してみると、①生命の根源・エネルギーの意、②その作用としての動き・状態・働き・雰囲気・性質の意、に分けられよう。日本での「気」の用法は、②の意味を中心とした情緒的な面（人間関係）での傾向が強いとされる。（『気思想』福永光司編、東大出版会） いずれにしても、「気」は生きている状態を包括的に把握する概念であるだろう。そこで、この「気」の意味を活用して、④現に今、呼吸し活動している高校生の生きた状態、生身の存在感や心の状態を分析・把握できないものかと思ひ、「気」の観点から生徒像把握をこころみていく作業、⑤把握した生徒の「気」の状態にふまえて、授業（現社授業）をどうアプローチしていったらよいのかという点、つまり授業実践者の「気」のあり方、働きかたの問題、⑥授業展開過程での生徒の変容を、「気づき」という観点から考察してみることを、考えてみた。以下、問題提起として記す。

(2) 生徒の「気」の状態

具体的な実践場面での生徒の「気」が対象となるので、本校での生徒像ということになる。ここでの生徒像が必ずしも高校生の平均像というわけではない。調査方法・内容については省き、生徒像のポイントのみを記す。「若者としての意欲、根気に乏しいこと、とりわけ学校生活や学習に対しては「気」力に著しく欠ける、かったるい気分、落ち着いた呼吸ができていない」。生命の根幹としての呼吸が正しくできていないことは、注目されてよい。

(3) 生徒の「気」への働きかけの試み

それでは、授業への「気」力に乏しい生徒に、どう対応していったらよいのだろうか。ここでは、授業実践者の「気」と、その働きかたが課題となる。

① 授業実践者の「気」

意欲・勢い・迫力などの問題である。「気」のあり方が問われる。授業者は、よい「気」をもち、発揮しなければならぬが、その「よい「気」」とはなにか、そのためにはどうしたらよいのか、ということに直面する。

② 生徒の「気」への働きかけ

「気」は呼吸でもある。そこで、1授業時間を、ひとつのよい深呼吸の時間と考えてみた。よい深呼吸がそうであるように、よい授業展開には、その場に心のすがすがしさが訪れるような「気」のはこびがあるだろう。そこには、みずみずしいエネルギー＝「気」が充満することになる。その見地からいうと、授業過程は、その場の「気」がよい深呼吸をしていく中で、生徒の学習が進展していくという流れとして設定される。そのために、授業展開では、どのようにしてよい呼吸をつくりだしていったらよいのかという問題に突きあたる。

(4) 「気づき」ということ

「気」力に著しく欠ける生徒たちを学習の場へ引き込み、かつ生徒みずからに学習する意欲をおこさせるためには、授業として学習の場や学んでいく「気」をつくりだしていくことが必要となる。それでは、そのような授業過程で、生徒にどのような変容(学習)を設定したらよいのだろうか。

そこで「気づき」ということを考えてみた。授業では、その過程で生徒が“ある事に気づく”ことが重要と思われる。「気づき」は「気」「付き」であって、気がハッと付くことをさし、いままで全くわからなかったことや、ぼんやりしていた事柄が自分にとってハッキリする事態を意味する。認識、意識化、意味化と言いかえてもよい。ここで、「気づき」を「図」と「地」の反転という観点から、簡単に説明しておく。



左図には、顔と盃が描かれている。しかし、顔が見えるときには、白い部分は背後を形づくるにすぎず、盃は見えない。盃が見えるときには、顔は見えない。一度に顔と盃が見えることはない。この場合、見えているものを「図」、その背後のものを「地」という。

「図」は、いまハッキリと“気づいている”世界をさし、「地」はその背後を構成し、“気づいていない”世界である。ところで、いったん「図」に注視してしまうと、その背後にあるものに「気づく」ことはなかなかむずかしい。「地」を「図」化したり、「図」を「地」化したりが、なかなかできない。「気づき」とは、したがって「地」の「図」化過程といってよい。生きている世界をより深く広く柔軟に認識していく作業ともいえよう。

この観点からみると、われわれの意識にはっきりとのぼっている事柄は「図」と

いえるものであり、その背後には「気づいていない」「地」が存在する。その意味からいえば、われわれの経験は「図」化したものの総和である。

さて、このことにふまえて授業での「気づき」を考えてみる。現社を学ぶ場合、まず生徒のそれまでの生活経験、人生経験が前提となる。ところで、それらの経験とは生徒自身が「図」化した社会感（観）、人間感（観）である。それらは、生徒自身の人生展開に「気」の発揮によって構成された「図」といえる。したがって、現社授業での「気づき」とは、生徒が「図」化した社会・人間観（認識）の傾向にふまえてその背後の広く深い世界に「地」を「図」化させていく作業、といえるのではなかろうか。このことによって、自己、他者、社会に対してより広く深い視野や生きる力を培っていくことができるのではなかろうか。

以上に基づいて、授業過程を「気」と「気づき」をポイントとして図示してみる。

授業過程の構造

流れ	呼吸のはこび（気）	「気づき」の創出過程
序 (導入部)		動機づけ、生徒の「気」の状態に基づき、授業者の「気」を働かせる。
破 (展開部)		生徒自身の「図」＝「気」のあり方に欲求の対象を手がかりに、背後の「地」に気づかせるようなアプローチ、生徒にとっての「地」の「図」化＝「気づき」の過程
急 (終結部)		「気づき」の再確認

(5) まとめ — 課題

生徒の「気」をめぐって、2、3のことを考察してみた。いずれのことも、単に問題提起にすぎず、今後の課題そのものである。ここでは具体的な授業展開例は、すべて省かれている。授業実践での具体的な取りくみの積み重ねを通して、さらに「気」の問題にアプローチしていくことが必要であろう。

「身」からの発想

明治大学教授 市 川 浩

我々はあらたまった時には、精神と身体という語を使う。これらの語は、mindとbodyの訳語として用いられるが、この時にはこれらは重なり合わない。これらの言葉を使っただけで、我々はデカルト流の心身二元論の枠組の中にとらえられてしまう。しかし、「こころ」と「からだ」は重なり合わないものではない。また、西洋では例えば心身問題mind and body problemというように、mindが先にくる。しかし仏教用語で例えば身心一如というように、身が先に来る。ここに重点の置き方の違いもある。二元論的でない発想から我々の生きている存在をとらえようとするとき、「み」というやまことばは、まさに相応しいものである。

身とはどのような概念であるかということ、もともとは「実」と同根であり、古代人が「み」と言うときには今の「身」よりもはるかに広い概念を包括したといえる。広くは皮も肉も種も含み、皮や種に対して使えば果肉を指す。この意味で、実体的より関係的なものである。また、自然的存在をも「み」と言うことから、人間の身体も木の実も同質とする西洋とは異なった連続性を感じさせる。「魚の身」という時には生命のない肉を指し、ここでは西洋のbodyと重なるが、「身ぶしが痛む」のように生命のある肉を指すことも多い。「身持ちになる」「身二つになる」「身々になる」といえば妊娠から出産、「身になる食物」とも言う。「身様」といえばからだの有様。「半身に構える」といえばからだの有様とともにあるところの状態をも指す。身につけたものも身になる。「身ぐるみ置いてけ」「身丈」「身ごろ」。「身あってのこど」「身代金」から「身終わりで蛇になる」「身まかる」は生命を示す。社会的存在として「身すぎよすぎ」「身売り」「身受け」。「身の油」といえばからだを使った労働の代金。また「みづから」「みがまま」「みをすてる」では自分自身を意味するが、「御身」は相手を指し、「身々」では各人、というように、何に対しているかで人称が変わる。ここには人間存在の社会化が示される。「身内」という言葉が血縁のみならずヤクザの世界や地縁関係、民族単位でも用いられる。この社会化は、「身に余る光栄」「身のほども知らぬ」「人の身になる」など、地位・身分・分限・役割を指すときにも見られる。

このようにたどっていくと、身は我々の具体的存在の全体であると言え、当然ころもその中に含む。「身にしみる」「身をこがす」など、それぞれ「心にしみる」

「心をこがす」とも言い換えられるが、心を使った場合は、いまひとつ切実さに欠ける印象を覚える。心を使うと表面的・意識的だが、身を使うとより全体存在にかかわり、生理的・無意識的なレベルまでしみる・こがれるという切実さがある。「身をもって知る」「身をもって示す」と言うとき、命かけてもという意味を含む。東洋の認識は「ことばで知る」だけ、「頭でわかる」だけでは駄目だというものがある。「からだ」という語はよく使われるが、このような豊富な熟語はほとんど存在しない。もみがら、かれる、からっぽ、といった語と同根で、生命や水分が抜けてしまったものを示すのであり、身には魂あるいは生命が入っており、これが抜けたものが物體的な「からだ」である。これは body に似ている。

「こころ」は、身と対立するものではなく、mindよりも heartに近い。「こる、こりかたまる」「こつこつ(鼓動)」のように、魂あるいは生命がこりかたまった、凝縮されたものを示し、「ここ(ろ)」という生命の中心を指す。西洋ではこころの所在を「胸から上」に見ているうちに、次第に「頭」に集中するが、日本ではむしろ「へその下」、「おなか」に「こころ」を見ている。「腹を割って話す」「腹黒い」「肝胆あい照らす」「肝心かなめ」「肝を冷やす」「断腸の思い」などにそれは示されている。

このように、身という言葉は二元論を超えているし、その意味も体系的に配列することもできない。われわれの身のあり方とは、特定のレベルにおさまることはなく、比喩的なものでもある。能や歌舞伎でも型をいうが、型をおぼえるのではなく、型をとることでそういう心の状態になるということである。身体修養によって心を鍛えるというのも、そういうことである。身は酸素や食物をめぐる外界との関係、さらには文化的レベルでも関係をもつことによって成り立つ。これが自己中心化である。しかしこの関係は、例えばここからあそこへ行くことで空間が、いまからやがてに行くことで時間がとらえられるように、脱中心化する。「人の身になる」という交換可能性をこれは意味する。ところがそれは新しいレベルの中心を得ることであって、再中心化である。なるほど人の身になることはできても、「身変り」はできないという交換不可能性でもある。これらの統一が、具体的存在としての身である。言いかえれば、身で世界を分節化し、同時に世界によって身は分節化されるという「身分け」である。自己中心化を極端に進めたり、脱中心化を極端に進めることは、関係的存在であるということを拒否することで、様々な問題をひきおこす。身の統合とは、現実にとった方向での統合のほか、様々な可能的統合もあり、

無意識のレベルで行なわれる構成的統合、意識のレベルでは志向的統合、これらを合わせて道具や言語を用いて行なわれる、仲だちされた指向的統合も行なわれる。そしてそれぞれについて自己作用的自己調整的統合すなわち自分自身を調節することで行なわれるものと、外部作用的外部調整的統合すなわち外部環境そのものを変えようという活動がある。次には同調の問題がある。これは実質的に結びつくというのではなく、離れていながら構造的同一化がおこることで、感応的同調である。人の身になるとは、そういうことである。いわゆる文化的・精神的レベルでの共感のもとにあるのがこの同調である。同調にも顕在的同調や潜在的同調、同型的同調や役割的同調、全体的同調や素描的同調などの諸相がある。ロシアの小説を読んでいて、人物の名前などなかなか憶えられずに入りこめないでいる同調不能の状態から、次第にその場面にひきこまれて観念的イメージ的に同調し、ラスコリニコフが老婆を殺して逃げていくところで文字通り手汗をにぎるという肉体的な同調に至る、という具合である。小説家の言語のように、かつては言語とはこのように魔術的な同調をひきおこすものであった。このような同調は、様々な社会的なレベルで間身体的同調をもたらす。例えば子供は反抗しながらもだんだん親に似てくる。不愉快だと思うクセが尚更よくうつったりする。これが社会図式化すると、習慣となり、言葉以前のコミュニケーションを形づくり、この違いが異なった文化の間での誤解を生む。

同調ができないということ、「人の身になれない」ということは、社会生活がうまくできないことであり、核家族化が進むことで社会全体にそのような傾向が生じていると言える。ここには道徳以前の問題がある。また逆に、核家族において同調が緊密になりすぎると、ベイトソンの言う二重拘束(ダブルバインド)が起こる。依存度の高い子供が、例えば可愛い可愛いと言っている母親に抱きつこうとすると、母親が無意識についつきはなしてしまうというとき、つまりコミュニケーションのレベルによってYESとNOが異なっているとき、子供は分裂しやすい。祖父母やおじ・おばがいれば解消され易いが、核家族では深刻化することが多い。

身は関係の中で統合される。従って場合によっては身変わりの可能性がある。つまりわれわれは、常に分裂したり、妄想をもったりすることがあり得る存在であるとしてとらえていかなければならず、関係によって変わるというのは異常なことではない。合理的な図式ではとらえきれない身の構造を考えていきたいと思っている。

(記録・文責 田園調布高 和田倫明)

〔第2回研究例会 公開授業〕

高校生にとっての労働問題

都立荒川工業高校 富塚 昇

12月末の職員会議で進路指導部から今年の就職状況について報告があった。昨年に比べて今年はかなりきびしいということだ。景気の動向などの要因からいって来年度もきびしい状況が予想される。現在2年生（公開授業を行なったクラス）の担任の私としては気がかりなことだ。

本校の生徒の大部分は卒業後すぐ就職する。労働問題を考える授業においてまずそのことを頭において構成する必要がある。発問する場合も意識して「君たちも1年後に就職試験を受けるわけだが……」という言い方をしてみた。また教室でまとまった形で学ぶということも大部分の生徒にとって本校が最後の場となる以上、現状の認識（授業でとりあげたことと言えば「労働市場の二重構造」）と認識の方法については是非おさえておかなければならないことだ。もっともこの問題は生徒の方が敏感にとらえていて、そのことが一種のあきらめムードを生み出しかねない、という問題も生じる。したがって（と書くべきか）働くことの意味をどうとらえるべきかという視点（1年の時の授業でもこの点には触れた。また授業ではどのような観点から会社を選ぶか、という問いも発した。答えは、会社の大きさ、給料、休みが多いか、ヤリガイなどがでてきた）が重要になってくる。私がここでとりあえず期待し、強調したのは最後の答えである。しかしそのことが現代社会の諸問題に対して目をふさぐことにもなりかねない。微妙な問題である。（授業ではこのこととの関連という意味を含めて、労働基本法の問題を公開授業の後とりあげた。）

今回公開授業を含め約8時間程「労働問題」を考えてみたが「社会」という場はポストとアイデンティティをめぐる争いの場という面がある以上、労働問題＝働くことにまつわる諸問題は上にあげた種類の問題に付随し、自分自身の問題も問われるという意味できわめて現代社会＝「現代社会」的な課題である。そして公開授業で御覧いただいた生徒もあと数ヶ月後には就職戦線に参加することになる。したがってホームルームなどでさらに発展させていかなければならない。2年程前の分科会で、ある先生が「我々の科目は広義の進路指導という性格をもっている」という主旨の発言をされたが、「高校生にとっての労働問題」という課題は、広義の進路指導という視点が最も要求されるもののひとつのように思える。

事例導入による「青年と自己探究」の学習

東京都立水元高等学校 大野 精一

1. はじめに

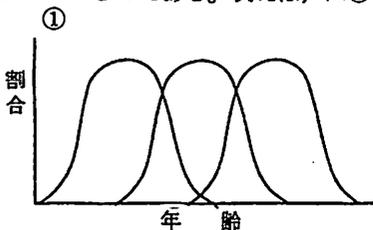
現代社会「青年と自己探究」の学習は、倫理・社会当該部分と同様に年々難しくなっているように思う。学習に直接かかわっている生徒の方でも「それは誰のことか」といった顔で聞いていることが多いのである。このままでは、「青年期における自己探究の重要性に気付かせ、これについて考えさせ、自己形成に積極的に取り組む態度を育てる」という目標と実際の授業進行が離るばかりである。どのようにしていったらいいのか。ここでは、生徒の実際の姿をとらえ直すこと、そしてその上で適切な動機づけを具体的に設定することの二点から考えてみることにしたい。なお、本稿は85年10月25日本会第2回研究例会での私の研究発表をまとめたものである。

2. 学習者としての生徒の状況

すべての教科目においてもそうだが、とくにこの分野の学習にあっては授業に参加する生徒（地域性もあるだろうが、現代日本の高校1年生）の実際の姿を「青年」として大きく把握する必要がある。しかしながら、今日学説上対立した見解（加藤隆勝・対立する青年観，教育心理85-11月号所収，がもっとも新しい）がある。われわれ教師も教科書も，規範性あるいは普遍的価値ゆえにその一方の見解に偏ってこなかったか。そのためもあって生徒の実態を十分に把握できず，かくして授業を聞いている生徒自身もどこかよそよそしいものになってしまった。という側面はないであろうか。まず，周知のことから整理してみよう。

marginal manあるいは Sturm und Drang（ここには「第2の誕生，自我の発達，悩み，不安，葛藤，反抗，社会的批判，理想etc」といったものが入るだろう）に代表される「古典的な」青年像（教科書・教師の考える）で今の生徒を考えられるか。これで実感的に了解されるか。古くはM. ミードが「サモアの思春期」（1926年）で大人と子供の連続性，葛藤のなさなどを指摘し，先の「青年」概念に対して疑問を呈していた。先進工業国における社会化と個性化のからみの中で「青

年」概念が考えられるとしたものであろう。さらに、1950年代から出はじめた学説（エルキンら、バンデューラー、ドーバンら、に代表される）は実態調査（アメリカの青年を中心としたが、さらに先進工業国へと対象を拡大した）に即して危機としての青年期を否定し、しかも子供 → 青年 → 大人といった発達の連続性を主張しているのである。例えば、図①にみられるごとく課題は集中せず葛藤は生じ



焦点理論のモデル

異なった問題は青年期の異なった時期に焦点化—その年齢集団の中で顕著な問題となる—されることを示す（Coleman, J.C., 1978による）。

ないとされる。これが青年期延長論にもつながっていくのである。では、どう考えたらよいか。

図②は1つの立論である。「確かな、コミット（依拠）に値する価値を内に取りこむことができれば若者の生も充実したものになるはずだ。しかし、いま、若者は何にそれを求めればいいのか。価値が多元化し散在してしまった

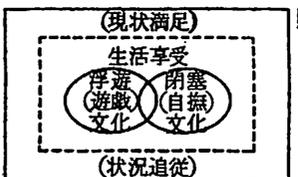


図 12-10 現代の若者文化の構図

現在に生きる方法は二つ。一つはそうした空間を楽しみ軽やかに浮遊し続け、時間をやり過ごすこと。あと一つは、周囲と断絶し一点に閉塞することで自間（自分だけの空間）を創り出すこと」（放送大学印刷教材「青少年文化」）。

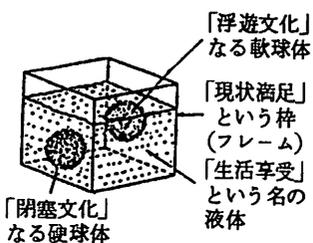


図 12-11 現代の若者文化のイメージ

〈門脇厚司 1985 より〉

若者文化のイメージから「現代的」青年像が思い浮ぶ。われわれが日々授業で接する生徒は、こうした「青年」に近いのではないか。これでいいというのではもちろんなく、要はこうしてとらえたうえで（少なくともこうした分析視角を加味して）、これをどうつき崩し、そして「青年と自己探究」学習として構成していくことである。（なお、現代青年にみられる「不安」については、精神科医である笠原嘉氏の研究をベースにして報告

したことがある。85年6月18日本会第3分科会 大野精一・「不安」の持つ意味—笠原嘉『不安の病理』を中心にして—）

3. 学習の動機づけ

青年心理学の研究法（記述法）を、金子書房・青年心理学講座（全5巻、1955年刊）と同・現代青年心理学講座（全7巻、1973年刊）で比較してみると、おもしろいことに気付く。前者では、日記・手記・文学作品が多用されており、私にとっては非常にわかりやすいもので教材研究に最適の文献であった。しかしながら、研究方法の発達（実態調査的、構造探究的、投影—解釈的、臨床面接的などの方法）に従って近年流行している科学的なリサーチで何かわかるのだろうか。「現に青年を指導し治療する者にとって、ないし、現に悩み苦しんでいる青年個人にとって、統計的資料やプロジェクト法は、なんとも迂遠な数値の羅列にすぎないと感じられた。こうして、オルポートの個性記述的の科学の立場に立つ青年研究の方法も求められる」（現代青年心理学講座第1巻）状況にある。たんに平均像として青年を描くのではなく、典型像、したがってある種の規範性も含みながら「青年」を把握することが必要なのである。

以上のような研究史の流れで考えるとき、授業構成で参考とすべきものは何であろうか。先の「青年実態把握」の研究もふまえてみると、教科書等に見られる「青年」（「古典的」）では生徒の中に入っていないのではないか。だから、いくら日記・手記・文学作品・新聞記事等で具体化しても無理がある。生徒の言葉をつかえば、「白ける」し「うそっぽい」ということになるのだ。しかしながら、統計的手法をつかった「青年像」（「平均的」）では、確かにそうだが、だからといって何だ、という間が出てこよう。これでは、それから先がないのである。とすると、私としては確かにそうだというためには今後の授業実践をさらに積み重ねる以外にはないが、当面は、青年の典型像を考慮しつつ現にいる生徒の日常で生じた現実的な「事例」こそ生徒をひきつけ、諸課題にむかわしめるものと思っている。次にこの具体例を示すことにしたい。

4. 具体的な実践例

『現代社会』研究授業計画

84年2月17日 社会科 大野 精一

① 形態・テーマ

外部講師による公開授業とする。テーマは「青年期の諸問題をめぐって」。

② 前回までの授業進行

- 1) 青年期とは何か
- 2) 現代青年の特徴
- 3) 友人・異性との出合

いの中で 4) アイデンティティの問題 5) 不安と不適應 6) 個性とは何か 7) 自己実現へ向けて (この構成については、拙稿・現代社会「青年と自己探究」を授業でどのように構成するか 紀要23集)

③ 研究授業計画

3月2日(金)第6時限 1年3組「現代社会」

講師 都立教育研究所相談部 カウンセラー(研究主事)

多賀谷 篤子さん

内容 さまざまな相談ケースの中から一つの事例(依存と独立にかかわるもの)を報告してもらい、その人を理解すること、そして自分だったらどうするか(追体験・援助など)をグループ討議する。その結果を発表し相互理解を深める。合せて自己理解にも配慮する。

④ 時間配分

5分 大野による導入(本時の主旨説明)

40分 多賀谷さんによる講義等

5分 大野によるまとめ(本時の意味と展望)

⑤ その他

本時の授業について感想文の提出を求めた。(その中には「こんにちわ。きのうはくらす中しーんとしていて、とてもぶきみでした。でも、みんな一生懸命話を聞いていて、たまにはこうゆうのもいいなあと思いました」というような当時の雰囲気伝えるものも含まれている。いくつかの感想文は、研究発表当日レジュメにつけて配布したので、参照していただければ、幸いである。いずれにしても、生徒に一つの「ショック」を与えたことは確かなようである。)

5. おわりに

「青年と自己探究」という生徒自身にとってもっとも身近かなテーマが、もっとも遠い距離で授業構成されているのではないか、という疑問から本稿は、始まったが、まだまだこれから先たくさんの解決すべき課題が残されている。私としては、一つ一つ授業の場でどうなるかを検証しつつ、合せて文献研究にしたがって多角的な検討を今後とも継続するつもりであるので、御意見・批判をお願いしたいと思う。

現代におけるテクノロジー 文化人類学の視点から

東京外語大助教授 川田 順造

黒人アフリカには、木工、カゴ編み、ひょうたん細工などのすぐれた伝統技術が植民地化以後近代産業製品が次々と持ち込まれるようになって、しっかりと持ちこたえている。ろくろを使わない土器作りの技法などは、工芸科出身の家内がいわばアフリカから技術導入し、個展の出品作にも用いたほどである。これらの技術はその自然条件や土地の性格によくマッチしたのもっているのである。

アフリカのマリ帝国で14世紀につくられた回教寺院や、16世紀ソングイ帝国の王墓などは、日干レンガを泥で塗りかためて作られている。従って、後代の人々が常に壁面をつくろいながら今日まで継承されてきている。スフィンクスやピラミッドとは違って、新しく生まれて来た者がそれらを直し直し伝えていくという方法は、長い時間を隔ててメッセージを伝えていくもう一つの方法なのである。物自体はこわれ易いが、作りかえて伝えていけば長持ちする。伊勢神宮の遷宮も同様の思想であろうし、石碑よりも木や紙に筆写すること、さらには文字をもたないアフリカでの口伝による伝承もそうである。このような方法は、場合によってはより長続きするとも言える。

ヨーロッパからの文化は、丈夫でこわれにくいもの、大きなものを立派だとしてきたが、1970年代以降、small is beautiful の考え方も生まれてきた。アフリカの住宅も居住者の増減に応じて簡単に作りかえられる、いわばユニット式住宅であるし、その他の技術も自然の循環系の中であってすぐ作れ、捨てても土に帰るものである。

アフリカへの技術移入にも問題が多い。鋤を使って耕やす方法とは対比的に、家畜に鋤をひかせて耕す技術がアフリカに持ち込まれた。この方法で効果的なのは、種をまく前に畑を耕し、その後で種をバラまく方法である。ヨーロッパの麦作は、冬雨に頼るので、雑草の問題もない。アフリカにこの技術を持ち込むことには問題が多い。熱帯では土を掘りおこして太陽にさらすと、鉄分が多いので酸化鉄ができて、鋤をはね返すほどカチカチになってしまう。うすい腐食土の表面に浅く穴をあけて種をまくというやり方が理にかなっているのである。加えて、サバンナでは雨が降るまでは一面が枯野原になっている。すなわち、やせこけた牛を耕作にこき使

うことになってしまう。家庭に大きな牛が入り込むこと自体でも大変なことだ。こうまでして牛に鋤をひかせる意味があるのだろうか。

また、日本や中国で非常に有効な灌漑技術も、アフリカでは焼け石に水ということがある。オートボルタでも独立後、ヨーロッパの援助で百ヶ所のダムをつくり、水をためることには成功したが、畑にひくとなると絶望的で、結局牛に飲ませたり魚の養殖に使っているような状態である。

農業生産性の考え方にも二つある。稲は、同じ土地で連作しても大丈夫という大変まれな作物である。水利もあって狭い耕地に農民はしばられ、従って単位面積当たりの生産量で見ると、その生産性は非常に高められてきた。すなわち、「土地生産性」は極めて高い。しかしながら、もう一つの見方は「労働生産性」である。日本では土地生産性を高めるために、朝早くから夜遅くまで、膨大な労働力を投入してきた。すなわち、労働生産性は低いのである。熱帯は逆で、あまり手をかけずに、ある程度の生産をあげてきたのである。しかし、人口密度が増し定着性が高まって問題が生じてきているとはいうものの、東アジアの考え方を持ち込めば済むというわけでもない。

先進国の技術が次々と持ち込まれ、機械化が進んできているが、伝統的技術を生かした内発的な開発はできないものだろうか。1970年代から近代化の反省は高まり、オイルショック以来の資源危機の問題もある。途上国に最新技術を持ち込んでも、その技術を自己生産できず、維持することすらできない。「開発途上国」という言い方にも、先進国との対比はすなわちある一定のゴールに行きついたか行きついていないかという考え方があり、思い上がりがある。「一つのゴール」という考え方自体がおかしい。現代は、いろいろな、未だ共有されていない技術を持ち寄って知恵をしばっていくという段階にあるのではないか。一方的な「技術援助」ではなく、「技術協力」という相互的な考え方が必要になってきているのではないか。

(記録・文責 田園調布高 和田倫明)

記録者註：先生の御講演はアフリカの伝統技術のスライドや、実物を交えての大変興味深いものでした。ここではそれらをお見せできないため、先生の御講演の主旨を十分にお伝えできなかったかと思ひます。先生並びに読者各位にお詫び申し上げます。

〔第4回研究例会 公開授業〕

仏教の思想について

都立駒場高校 細谷 齊

気持は昔の通り若いつもりでいるが、私もすでに40歳を越え、人生の半ばに達したという思いを深くすることがある。教師としても20年を過ごしてきたわけである。このような年頃の教師を世間では中堅とかベテランとか呼ぶようであるが、私自身の思いとなると、そのような感じは全くしていない。「教師にベテランなし」という言葉があるそうだが私もそのように思う。例えば20年間も毎日教壇に立って授業しているのであるから、授業に慣れ、さぞ授業がうまくなったかといえ、そのようなことはないのであって、私にとっては、現在でも毎日の授業は依然として難しいのである。素直に言って私は授業が苦手である。苦手ということは、授業がやりたくないとか、嫌いだとかいうのではなく、授業というのは難しくてなかなか思う通りに出来ないということである。チョーク一本あれば教室に行って授業をすることは出来るが、生徒の心魂に染み通るような授業をすることは難しい。教師は満足度が甚だ少ない仕事だなとしみじみ思う。教育とか授業には、「これでよい」という自己満足さえ求め難いのではなからうか。そのような気持でいる者に、授業を公開して欲しいという依頼がきた。筆名先生よりのお話し由お断りすることも出来ずお引受したのであるが、人様にお見せするような授業が出来るわけではない。都倫研の例会で公開授業をするのは私は二度目であった。一度目は前任校の墨田川高校で十数年前に道元の授業を行った。あの時は当時流行の生徒の発表授業を公開した。今回は科目も「倫理社会」から「現代社会」に変わり、授業形態も私の一方的な講義式の授業であった。「現代社会」の第二分野の宗教のところの仏教の授業という設定になった。釈迦の生涯を誕生から入滅まで話すつもりであったが、35歳の悟成道までで時間がきてしまった。普段の通りの授業で特に何等の工夫はしなかった。しなかったのではなく出来なかったというべきであろう。とにもかくにも、私には私のやり方でしか授業は出来ないということである。良い授業をしたいという気持は十分にあるし、面白く楽しい授業のための工夫も必要であろう。しかし、私はつくづく思うのであるが、各人の授業はそれぞれの教師の持ち味以外にないのではないかと。最後に拙い授業を見て頂いた先生方に御礼を申し上げます。

「イエス」をいかに教えるか

正則高校 紺野 義 継

私たちは今日イエスについて、生徒にどう語ったらよいのだろうか。「聖書を理解しようとするならば、私たちは遅かれ早かれ、非神話化や史的イエスの問題に逢着せざるをえないのだ。そしてこの問題について一致した見解がないということは、イエスがキリストであることの意味と根拠が不明となったことを意味している。つまり現在、キリスト教界においてはキリスト教信仰の中心が揺らいでいるのだ。この事実は、教会の中の人も外の人も、キリスト教神学に関心があるなら知っておいた方がよいだろう」（八木誠一「イエスと現代」170頁）。キリスト教というとクリスマスしか知らない生徒たちに、私はキリスト教の中心教義は復活であって、その意味ではイースター（復活祭）こそ重要な祭典だと以前まで教えていた。「イエスの復活 — その後キリスト教信者と呼ばれることになる大群の信仰と希望の土台をなし人生観及び価値観の中核をなす復活」（犬養道子「新約聖書物語」500頁）は、AD 50年頃成立したと推定されるQ資料にはなく、「我々は現在力なくとも受難・復活伝承を欠き、贖罪信仰を全く知らない伝承を担ったキリスト者の一グループが原始キリスト教史上その比較的初期の段階に存在したことを承認しなければならない」（荒井献「イエス・キリスト」377頁）となると、たとえ復活が幻視（J. カーマイケル「キリストはなぜ殺されたか」10章）や、仮死状態からの計画的な蘇生（H. Schonfield「the Pussover Plot」）、または「弟子たちの心の中に起こった信仰的事実」（新井智「聖書を読むために」158頁）という解釈にしろ、今日以後においてキリスト教に必要な不可欠な教義とは考えられない。ルナンは、イエス・ルネッサンスの幕明けとも云える1863年の「イエス伝」で、「イエスは専らイエスの弟子と自称する人たちだけのものではありえない。イエスは、人間的心情を持つほどの者の共有の名誉である」（59頁）と云っているが、この言葉こそ、私たちがイエスをもって生徒に立ち何かえる動機付けとなろう。実際幼児期に読まれたクリスマスや復活のイエス物語によって、多くの人々がイエスを歴史の外にしりぞけてしまうのである。

イエスを取りあげる時の主題は「愛」である。キリスト教は一般に愛の宗教と云われる。今日、愛の問題ほど切実な問題はない。これ程豊かな社会で、これ程多く

の孤独な日常生活を送っている人々の多さに気づくのは、一体どうしたわけだろう。人々が目ざした豊かな生活は、現代人の心を必らずしも満足させるものではなかった。人々が相互に求めている愛について考察しようとする時、題材は種々あるだろうが、思想史のなかではやはりキリスト教が、そして人物としてはイエスが取りあげられるだろう。

資料として、新約聖書・共同訳の「最も重要な掟」(マルコ 12 28-32, マタイ 22 34-40, ルカ 10 25-28)を用いる。

「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか」。

イエスは答えた。「第一の掟はこれである。『イスラエルよ、聞け、我らの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、お前の神である主を愛せよ』。

第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛せよ』。
これに勝る掟はない」。(マルコ)

しかし個々の福音書記者のこの章句の編集目的の違いによって、表現も異なっている。「これをもってイエスの思想全体を括るにはかなり慎重でなければならない」(荒井猷「イエス・キリスト」204頁)が、「むしろこれには、教団伝承者あるいは福音書記者たちによるイエスの教えの総括を見出すべきであろう」(同所)、さらにこの句の「言葉がイエス自身にさかのほることを全く否定することはできないであろう」(同 203頁)という解釈を積極的に評価し、資料として用いる。

最初に私は、赤司道雄著「旧約聖書からイエス」の序から得たヒントを用いて、黒板に「私は()を愛する」と書き、生徒に()の中に言葉を入れさせる。友、父母、兄弟姉妹、音楽、詩、野球、海、山、花、犬、猫、女、金、その他これに準ずる言葉はでてくるが、まず「神」がでてきたためしはない。他のクラスには、「私は神を()」と板書して、述語を入れさせる。信ずる、敬う、おがむ、頼る、などはでてくるが、「愛する」はでてこない。ここで「神を愛する」というキリスト教の独自性に気づかせ、日常用語としての愛との異質性に気づかせる。

次いで以下の二つの文章を板書し、どちらの文章が道徳的と思うかと問う。「①隣人を愛するように自分を愛せ、②自分を愛するように隣人を愛せ」。45%の然もいわゆるまじめ型の生徒が、①と答える。そこで「自分を愛するように」の方が、ユダヤ・キリスト教の教えであり、しかも「旧約時代にはあまり注意されていなかった戒めであるが、イエスによって律法の中心に選ばれた」(「旧約聖書略解」中

の船水衛司「申命記」)ことを教示する。

愛とはまず「自分を愛する」ことから始まる。「自分を生かす」ことから始まる。この経験がなかったら、どうして私たちは他人を愛することができようか。愛とはまずもって主体的行動なのである。

さらにルカを引用して、イエスに対して、「では、わたしの隣人とはだれですか」という問いのあったことを示す。生徒にとっては「隣人を愛する」ことはおぼろげながら理解できるが、むしろ「神を愛する」ことの方が理解できない。この問いに対して、イエスはあの「善いサマリア人」の話をし、「行って、あなたも同じようにしなさい」と結ぶ。生徒にこの章句を読ませたあとで、「どうしてこのサマリア人は、このような行ないができたのだろうか。多くの人はあわれに思っても祭司やレビ人のように通り過ぎてしまうではないか」と問う。これはむずかしい質問だ。これまで大抵の場合、私の方が私の考えを云い出す。「このサマリア人は以前追いはぎに襲われた経験の持主かもしれない。あるいは助けられた人が、このサマリア人の顔見知りだったのかもしれない」。生徒の顔にやっと安堵の表情がうかがふ。

逆説的だが、私たちが善いサマリア人のように行動するには、私が述べたような条件が必要であり、隣人を愛するためにはまず自分自身が隣人になろうとし、なっておく必要がある。人を助けることが愛なのではなくて、そのような人の隣人・友人になることが愛なのである。

それでは「神を愛する」とはどういうことなのだろう。神とは人間の創造主、つまり生命の与え主で養育者である。「神を愛する」とは、「神のようになること」、「神の子」となることであり、したがって生命を育む人になることである。旧約聖書の愛という言葉は、家庭生活からきた言葉だと云うが、とくに神への愛は、「あなたの神、主を恐れ、そのすべての道を歩んで、彼を愛し、心をつくし、精神をつくしてあなたの神・主に仕え」(申命記 10 - 12)と云われるように、恐れをともなっている。生命への畏敬、シュバイツァー流に云えば、これこそ神への愛と云えるかもしれない。神への愛と隣人愛は、この点で合一する。隣人の生命への配慮は、その与え主の神への配慮となる。

しかし以上ですら、私の解釈であり、生徒にとっての考え行動する時の一契機でしかないだろう。

最後にルナンの「イエス伝」から一文を引用して終りとしたい。

「イエスの説教、ガリラヤでの自由な行動も、やはり、我々の慣れている社会状態においては想像しがたいものがある。こうした人々はすべて、我々の文明の慣習に縛られず、我々を洗練しはするが我々の個性をひどく弱らせるところの画一的教育を受けず、行動のうちに驚くべき精力をそゝいだものである。(中略) これらの人々だとして、我々の兄弟であったのだ、我々と同じ背文を持ち、我々のような感じもし考えもしたのだ。たゞし彼らにおいては、神の息吹きは自由であった。我々においては、神の息吹きは、救い難い凡庸さに陥った情けない社会の鉄鎖につながれている。(津田 稔 訳)

都立高校私の歩んだ道

都立蒲田高等学校長 鮎 沢 真 澄

私は都立高校で三十四年間勤めてきて、校長会で何か特別の肩書きもないし、実質的なことは何かと考えると、やはり都倫研とのかかわりということになる。

九段高校時代、受験主体の雰囲気の中で常に疑問を持ち続けていたところ、井上忠先生から試験では「思う」と黒板に書いて自由に論述させて、オリジナリティやひらめくものがないか評価するという話を聞いた。そこで自分も「しみじみ思うこと」「このごろの私」「わからないこと」をテーマに書かせて、生徒の実態、実存的状況をつかんでみたいと思った。これについてのレポートを作成し、倫社についての講習会で報告したが、指導要領に即した展開について形式を踏まえたレポートが求められていたもので、無視されてしまった。この他に研究生時代のレポートや高校紛争、それ以後の状況、これからの展望など五編から成る論文集を自費出版しようとしている。また駒場高校では大学時代の聖アウグスチヌス告白録における汝の考察を研究紀要にのせたが、これも反応がなかった。

しかしこれらのいずれも、後から興味をもって読んでくれ、評価してくれる人がいるのを知った。孤独の中での救いとしての一言との出会い。これは教師としてのつとめでもある。今は、昔より一層、高校生は孤独の中に生きている。時間的に長々とではない、一瞬の出会い。不幸にしてその一言に出会えないがために「いじめ」の犠牲者になるものがある。

人間は美しい環境の中にいれば自づと美に対する感覚も鋭敏になり、自づと美を愛するようになる。清掃の問題も、環境汚染等の問題が精神の状況にまで及んでいるといえよ。大人の社会が情報社会の中で急速に変化し、それへの対応が教師にできていないところにも悲劇が生まれる。中道とはどこにあるのだろうとも考えさせられることが多い。教頭時代、学校でおきた生徒の事故や、教員がおこした事故の処理などに忙殺されたことを思い出すと、大人社会の構造が子供のいじめの救いのなさに通じるものと思う。問題が見えれば戦えるのに、見えない状態の中で、我々の生活の日常にも怨念から解放された静かな世界がふと現われることがある。多くの人々の力に支えられている、他力に生き生かされている世界である。民芸の美も、名もなく悟りもない庶民の生み出すもの。この他力の世界に生きていく希望があるのではないか。

(記録・文責 田園調布高 和田倫明)

「教育雑感」

都立国分寺高等学校長 井原茂幸

私は公務員の誘いを受けたり、大学に来ないかと言われたりしたことがあったが、それでも教師として生きてきたのは、心に焼きついた幾人かの先生の影響である。農家の長男として生まれた私の中学校進学を、毎晩日参して父を説得して実現してくれた担任の若い先生をはじめ、中学のときにも素晴らしい先生に出会った。

家が貧しかったので、当時貧しくても行ける師範学校に入った。しかし、戦争が激しくなり、繰り返しの動員、やがて海軍へ。戦争が終わると焼け残った女子師範に間借りして一年で卒業し、町の小学校の教師になった。いざ教える立場に立ってみると、学生時代にはあまり勉強をすることができなかったことを強く感じ、自分自身がしっかりした信念を持たずに授業をすることに非常な反省を強いられた。そこで、大学に入るために一年間独学した。もしあの先生が担任にならなかったら、今ごろはミカン作りをしていたかもしれない。先生の言葉が、私を燃え上がらせ、激励し、勇気づけてくれた。教師の言葉は、また逆に子供を失望させ、自殺に追い込む凶器にもなる。

中学校で大変なクラスを担当したとき、若さもあって何とか言う事をきかせようと躍起になった。教師をやめようとも思ったが、四つに組んで必死になった。前日に倒れて卒業式に行けなかった時、式が終わってから皆が狭いアパートに花束を持ってやってきてくれた。その時の卒業生たちとは登山などを通じてずっとつき合いが続いている。技術がまずくても、一対一でぶつかれば必ず通じるものだ。

鷲宮の教頭時代、とび抜けて意欲に欠け怠惰で、単位はやれないと主張した生徒がいた。結局追試をすることになったが、勉強以前の問題であった。私が何回かして自分の体験を語って聞かせたところ、それまで頑だった彼がぼろりと涙をこぼした。私は反省を見てとって単位を与えた。数年後、家族で食事に行ったときに、アルバイトの人達にてきぱきと指示を与えている蝶ネクタイ姿の彼に偶然出会った。彼はどこからか菓子箱をもってきて、お土産に渡してくれた。私は一時期で人間を評価してはいけないと恥じ入った。教師は「遠くを見る目」「多角的総合的に見る目」「本質を見る目」を持たなくてはいけない。スペシャリストでありながら倫理性をもつということが、教師にとっての課題であろう。

(記録・文責 田園調布高 和田倫明)

講演

「倫理・社会と学校経営」

都立富士高校長 道 広 史 行

私は本来倫社は専門ではなかったが、佐藤勇夫先生に誘われて、都倫研に参加するようになった。都倫研でつくり上げた『指導内容についての研究』は、授業のみならず学校経営の仕事にも大いに役立っている。

教頭時代は学校の都合で倫社を教えたり政経を教えたりという状態で、校長になってからは学校経営の仕事に煩わされ続けてきた。校長の仕事については、学校管理という言い方もあるが、このような言い方は余りしたくない。管理というと、外からの規制行為の意味あいを強く感じる。学校運営というものは、内とか外とか言わずに、一体となって行なっているものと考えている。

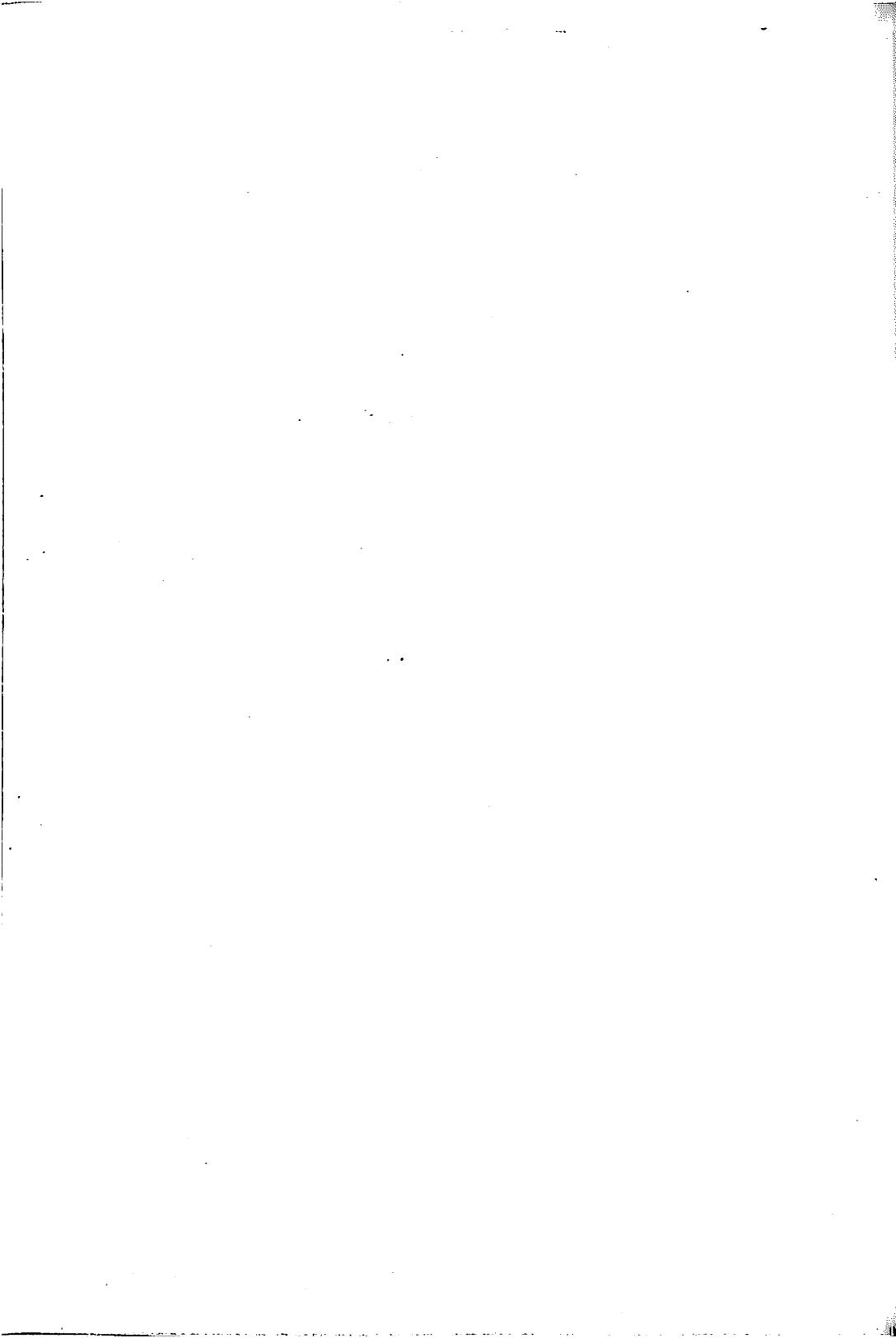
これには、二つの方法があると思う。一つは、理論的・知的な経営であり、法律的・組織論的に理論武装して進めていく方法である。いまひとつは、人間的とか情動的とか、適切な表現ではないがそのような方法である。勿論、これらははっきりと分離できるものではないが、私は幸か不幸か後者のような姿勢でこれまでやってくることができた。このような方法は、決して心情的な慣れ合いによるものではなく、相互に共感的な、校長と教員が大仰に話さなくてもわかり合えるようなものである。ここでは独断や勝手は通じない。多少とも学問的な、すなわち倫理的な背景が、教員にも生徒にもわかってもらえていれば、意見が異なっても円満にほぼ望ましい方向に向かってくれるし、生徒の協力も得られると考えている。

富士高の全日制の生徒会誌に、数年前から原稿の依頼を受けるようになった。最初は「自由」。続いて、「愛」、「生きる」、「青春」と、テーマを与えられて書いており、その時々にも前述の本や都倫研で教えをうけたことが役立ってきたのは勿論であるが、生徒にも先生方にもわりあいと読まれ、評判も悪くない。

この学校はかくあるべきだなどと理論を振り回さなくても、倫理的な背景がわかってもらえることで、随分と助かってきている。倫理的なものをもつというのは、われわれはどんなに立派にふるまおうとしても所詮非力なものであるから、たいせつなことであり、学校経営のうえでも重要ではないかと思っている。

(記録・文責 田園調布高 和田倫明)

IV 研 究 報 告



研究経過報告

都立清瀬東高校 上村 肇

第1分科会では「現代社会の基本的な問題を探求させる指導方法の研究」をテーマに、文献講読を中心とした研究を行った。

以下、今年度の会合での活動内容を記す。

① 第1回 7月6日(土) 新宿高校

古山(学芸大附)、葦名(豊島)、工藤(三鷹)、酒井(新宿)、坂本(南)、辻(田無工)、富塚(荒川工)、中村(千歳丘)、橋本(本所)、渡辺(深川)の各先生と上村の11名が出席。古山先生より『日米最終戦争』馬野周二・徳間書店についての報告をいただいた。討論では、馬野氏の方法・著作をどう評価していくかということから口火が切られた。そして、話題は戦後日本の論壇における論調変化がなぜ起こってきたかということにも発展し、日本にとってアメリカとは何であったかということや、70年を境として戦後民主主義のイデオログの声小さくなったことなどが話された。

② 第2回 8月30日(金) 東京都教育会館

富塚(荒川工)、葦名(豊島)、新井(東村山)、江方(南葛飾)、工藤(三鷹)、古山(学芸大附)、水堀(大山)の各先生と上村の8名が出席。富塚先生より『経済倫理学序説』西部邁・中央公論社について報告をいただいた。西部氏の著作をとりあげた問題意識から討論が始まり、ケインジアンの評価などへと発展していった。保守主義や大衆社会論をめぐる話が進んだところで、現代のような物質的な豊かさの中で果たして「豊かさの社会科学」というものが成り立つのだろうかという疑問も出された。

③ 第3回 11月2日(土) 新宿高校

水堀(大山)、江方(南葛飾)、酒井(新宿)、渋谷(墨田川)、渋谷(大崎)、富塚(荒川工)、橋本(本所)、増渕(片倉)、渡辺(深川)の各先生と上村の10名が出席。水堀先生より『天皇制の政治構造』神島二郎編著・三一書房について報告をいただいた。我々にとって天皇制とはどういう存在なのかという問題意識から出発して、生活のいろいろな面をつきつめていくと天皇制の構造にぶつかることから、日本人の意識と天皇制とのかかわりへと話題が発展していった。そして、

明治以降の日本において天皇制と家父長制が結びついてきていることや、差別の問題など、克服すべき課題についても話し合われた。

④ 第4回 12月7日(土) 新宿高校

岸本(豊島), 葦名(豊島), 新井(東村山), 泉谷(江戸川), 江方(南葛飾), 酒井(新宿), 辻(田無工), 富塚(荒川工), 原田(忠生), 水堀(大山), 渡辺(深川)の各先生と上村の12名が出席。岸本先生より『河童が覗いたインド』妹尾河童・新潮社について報告をいただいた。討論では文化をどう扱ったらいのかということを中心に話し合われた。外国での生活体験や旅行でのカルチャーショック, さらには外国語学習といったことにも発展した。文化については教えることによって生徒がかえって何かを見落としてしまう危険があることや, 自分の視点をはっきりさせなければならないこと, 西洋の視点を相対化していかなければならないことなどが話された。

⑤ 第5回 2月1日(土) 東京都教育会館

新井(東村山), 葦名(豊島), 江方(南葛飾), 小河(四谷商), 工藤(三鷹), 辻(田無工), 富塚(荒川工), 水谷(秋川), 水堀(大山), 渡辺(深川)の先生方と上村の11名が出席。新井先生より桜井哲夫著『ことばを失った若者たち』(講談社現代新書)について報告をいただく。討論では日常の生徒指導の中で感じていることも話し合われ, 表面的なことだけを語ってストレスをまぎらわすような「自閉化」や, 若者に帰属意識が薄くなってきていることなどが話し合われた。さらに東村山高校の公開講座の資料として使われた同校の生徒へのアンケート(テレビ・ラジオ番組・雑誌・タレントなどへの関心を問う)も示され, 生徒像がどのようにとらえられるか, その特徴を述べられた。

〔第1分科会 参加名簿〕

葦名次夫(豊島) 新井 明(東村山) 市川仏乗(駒大高) 小川輝之(小平南)
小河信國(四谷商) 工藤文三(三鷹) 小嶋 孝(東) 紺野義継(正則)
齊藤正克(日大豊山) 佐藤 勲(小松川) 瀬戸 彰(保谷)
辻 勇一郎(田無工) 原田晴夫(忠生) 古山良平(学芸大附)
増淵達夫(片倉) 水堀邦博(大山) 宮川隆史(富士) 山下暎吉(小山台)
渡辺 潔(深川) 橋本己吾夫(本所) 江方正子(南葛飾)
岸本次司(豊島) 泉谷まさ(江戸川) 富塚 昇(荒川工)
浦野勝広(南野) 上村 瑩(清瀬東)

マンガから見る現代高校生の心象風景

— あだち充『タッチ』の世界を手がかりに —

東村山高校 新井 明

I はじめに

現代高校生が多様化してそのところが理解しがたくなったといわれて久しい。指導要領においても、高校生の多様化はキーワードの一つとなっており、そこから生徒の実態にみあった教授内容が要請されてはいる。しかしそう言われている割には彼ら高校生のこころのヒタまでわけ入った論考はそう多くない様である。

本稿は現代の高校生のこころを理解するために、彼らが強く共感を示しているマンガをとりあげ、その心象風景を分析することを通して、そのこころの一端を明らかにすることを目的とする。そのことによって、我々教える側に対する客体としての高校生の実像の一片をつかむこと、さらには『現代社会』教科書における青年期の取り扱い方、記述についての批判的視座を得るための手がかりをつかむ、ということまでゆけばと考えている。

さて、具体的な作品としてここで取りあげるのは、あだち充原作の『タッチ』というマンガである。（「少年サンデー」連載中）ではなぜ『タッチ』なのか。

それは第一に、このマンガが高校生からかなりの支持を得ているという事実があるからである。筆者の勤務する東村山高校での公開講座の準備のために生徒からとったマンガ接触度及び共感度アンケートでこの『タッチ』は上位を占めていた。また、三年前に『現代社会』の授業中におこなった同種のアンケートでも上位であり、そのアンケートでは、一位は同じ作者の『みゆき』であった。それから考えると現代高校生の中核部分のこころのある部分を確実に『タッチ』、もしくはあだち充の作品はつかんでいると十分にいえる。その意味で『タッチ』のつくる世界の心象世界の分析は現代高校生の心理分析の有力な手がかりの一つになりうるはずだ。

第二に、『タッチ』の特色はディテールにあり、その舞台となっているこまごましたもの — 学校、家庭の風景、ファッションなど — は'80年代前半の時代資料として残りうるリアリティーがあることがあげられる。少し大げさにいえば、一種の社会的価値をもつ作品ともなっている。

第三に、この作品は「それなりに」おもしろい作品であるからということである。マンガ世代がそのまま成長した教員世代を除いては、せいぜい授業中の内職の扱収

品として職員室にもちこまれる以外マンガとの接触は少ないであろう。そんな中で『タッチ』は読むに耐える作品の一つであることはまちがいない。(少しホメすぎか……)

とにかく『タッチ』の世界には現代高校生のサイレントマジョリティの部分、もしくは幼児化してゆく〈イ子〉と生き急ぐ〈問題児〉とにひきさかれているいまの高校生の中間部分の感性をすくいとっていると考えられるのだ。

Ⅱ 『タッチ』にみる心象世界

(1) そのアウトライン

『タッチ』の主人公は三人。双子の兄弟上杉達也と和也。そして上杉家の隣に住む浅倉 南という美少女である。兄の達也はとりえのないフツーの若者で、何の努力もせずのほほんと生きている。それに対して弟の和也は努力の人。成績優秀でカッコよく、野球部のエースである。美少女南は明るくかわいらしい皆のあこがれとなる女の子である。この三人に家族がからみ、同級生たちがからみ話は展開する。話の基軸はラブコメディとスポコン(野球マンガ)の二つであり、その二つが織り重なった世界が作り出される。

野球部のエース和也と南は似合いのカップルであるが、その二人にズッコケ兄の達也がからむ。南は和也と達也のどちらが本当に好きなのかわからず奇妙な三角関係がもし出される。同じ中学から高校に進んだ三人に対して、さまざまな同級生たちがライバルとして表われ消えてゆく。そんな中で高校一年生のエースとして甲子園出場をかけた地方大会の決勝まですすんだ和也は、その前日南に愛を告白する。それを聞いて思い乱れる南、さらに偶然聞いてしまった達也。翌日、和也は決勝戦の会場へゆく途中、子どもを助けようとして交通事故死してしまう。残された達也と南はどうなるか……。

ストーリーを要約するとざっと以上の如くなる。が、この際重要なのはストーリーではなくディテールである。

まず舞台。三人が通学するのは明青学園という中高連続の男女共学の私立高である。高校受験はなく、中学生からみて高校生活は「あこがれの」という形容詞がつけられている。作者はこの学園風景を自らの高校生活をもとにリアリティー豊かに表現する。

次に野球をはじめとする各種のスポーツ。高校野球が現在一種独特の価値観を高校生のあいだに作り出しているのは周知の事実である。それに和也の死後南が入部

する新体操。達也が一時入部するボクシング。放課後のグラウンドにはテニス、アメリカ、ラグビー。これらのスポーツのかん起するイメージは大きい。

主人公をとりまく登場人物。和也と達也の両親は「親としてよりも良き夫、良き妻として生きてゆくことの方が大事みたい」な人物。子どもについてはいたって放任主義でもある。南の父親は妻を亡くした後、喫茶店「南風」のマスターをしている。そして草野球チームの一員でもある。「南風」では南や達也が時々アルバイトをする。この両家は同じ敷地内に住み、主人公三人用の子供部屋を庭の中央に持っている。（このあたりのリアリティはどうも、と思われるが。）

最後にファッション。三人ともアイヴィー調をベースとしたオーソドックスな中高生ファッションを着用している。くずれたところはない。

(2) その心象風景

さまざまな舞台装置を通じて見えてくる世界はどのようなものか。それに強い共感を示す高校生の心象風景は何か。

主人公三人はどこにでもいる存在として描かれている。しかも現実の高校生が「こうあって欲しい」「こうありたい」と考える願望がかなり純粋な形で注入されている。和也と達也はその意味で男子高校生の内部にある二面性を外化させたものといえてよい。特に達也はズッコケながらやさしさを持つキャラクターとして現代高校男子の一つの理念型である。その意味において南は母性の理念型ということがいえよう。

家族についても同じことがいえる。ここに見られる父母像には現代の高校生の願望が色こく投影されている。それは軽い存在であり、クールな親子関係である。さらに南の家庭が欠損家庭であることは、最近のこの種のヒット作（例えば同じ作者の『みゆき』、赤川次郎の『セーラー服と機関銃』、『探偵物語』など）と共通しており興味深い。そしてかなり裕福らしいということも特徴である。この家族関係は「ホテル型家族」（小比木啓吾『家庭のない家族の時代』）をその風景としてとり入れているともいえる。すべて中流意識90%の世界の産物である。

次に学校。ここではなまなましい具体的な存在ではなく「学園」である。授業風景はあっても勉強、受験はない。スポーツはあっても汗、ドロの臭いはない。デオドラントスポーツ。教師は登場するが狂言回しである。すべて風景としての学校。学校をとりまく種々の重圧がみごとに排除されている。家族と同じく限りなく軽くなった世界がそこにはある。

そして人間関係。中心となるのは三角関係ではある。しかしそこには生々生々さが欠けている。漱石の『こころ』の世界と何と異なった世界か。しかも都合よく和也を事故死させてしまう便宜主義。こう批判をすれば出来ないことはない。が、ここには少なくとも〈他者〉の発見が存在はする。我々の眼前にいる生徒達はおそらく自分を発見するのはこのような恋愛相手たる他者の登場が必要で、さらに本格的な自己探求がはじまるのは三角関係になった時がはじめてなのだろう。その意味においてクールな人間関係を志向する高校生の中の本音の部分も内包している。

付け加えるに性。和也と南はキスまでの関係にはいる。それ以上ではない。性意識の変化は確実に倒来しているが、大多数の高校生にとっては現実キスまでのだろう。作者は南のレオタードスタイルや水着姿を好んでイラスト化しているが、その視線は男子高校生が共通して女性に持つ視線をあらわしている。逆に女性にとってはモラル的に許される限界を描いてもいると思われる。

Ⅲ 『タッチ』の世界から抽出される特徴

新人類ということばが市民権を得はじめている。新人類はエイリアンでもある。『タッチ』の世界は新人類の感性世界である。ではその特徴は何か。

第一は、それが自閉的世界であることである。中流上層の生活。軽い人間関係。風景としての学園、クラブ。どれをとっても社会的ひろがりを持たない世界である。さらに父の登場しない母性的世界でもある。ただ『タッチ』が唯一異なるのは、三角関係というこの世界に風穴をあける可能性を持つ関係をはらんでいることだ。しかしそれがどこまでこの自閉的世界を打ち破れる破壊力を持っているか。ともあれこの自閉的世界に自らの願望を投影させている現代高校生の心象風景は注目しておきたい。

中学から高校へ進学してくる時かなりの生徒達の心の中にある高校像はこの『タッチ』の世界なのではないか。恋愛、デオドラントスポーツ、アルバイトが願望だ。ところが現実の学校は当然その願いに応えない。さらに一方ではますます重くなる学歴社会(イリイチ流に言えば「学校化社会」)の現実は容赦なくのしかかる。その中で生きゆく生徒達に残された道は達也的なノンシャランな生き方なのだろう。アイデンティティの追求などはじめた日には大変だ。それは防衛機制の一種でもある。この世界を〈逃避〉と評価するのは自らの加害者性に気づかない者ということでもあろうか。

第二の特徴は、この世界が意外と古風な世界であることだ。『タッチ』の世界の

通奏低音、それは「やさしさ」である。新人類は、ビョーキ／フツウという感覚を持ち我々旧人類を辟易させる新しい意匠を持つとされる。確かに事件報道やアイドルタレントを見ればうなづける点が多い。しかしその新奇さの底には「やさしさ」志強が根強くあるらしい。「やさしさ」の世界は言葉のいらぬ世界、擦しあいの世界である。この何と古風で日本的なことか。但しこの言葉のいらぬ世界は実は「言葉を失なつた」もしくは「失なわされた」世界かも知れないのだが。

Ⅳ おわりに

『タッチ』の世界から現代の高校生の心象風景をみるという手数のかかる方法をとってみた。なぜなら高校生のこころのヒダにダイレクトにふみいるのはかなりの困難を伴うであろうからである。当の高校生自身、自らを表現する成熟した手段を持ち得ないから苦しんでいるのだ。（例えば十代の雑誌を標榜した「ヒストリーズラン」の中身は心情を直接吐露した詩のオンパレードであり、空回りをしているところが痛々しい。）三十歳前半のあだち充が十代の新人類の共感をひき出し得る作品を描く。このパラドックスは我々教員のパラドックスにも通じるものがあるのではないか。

『現代社会』の「青年期」を教える時に感じるある種の空しさの底には、我々のイメージする高校生像（アイデンティティ志向型）と現実のそれ（アイデンティティロス型）の差を埋められない我々のあせりとそれに追いつけない教科書記述の遅れへのいら立ちがあるのだろう。きわめて楽観的に表現すれば、『タッチ』を例にとればどうやらそうあせる必要はないかもしれない。我々は彼らの持つところの世界を了解することを通して、さらにその世界を穿つことによりもう一つの地平にすすむことができるかも知れない。「自閉」と「やさしさ」の世界に風穴をあけるのは一つには〈他者〉の発見であり、もう一つは社会性の導入であろう。前者は彼らを激石的世界に導くであろう。後者はさまざまな彼らの常識にゆさぶりをかけることにより得られる可能性をもつ。

ではそのゆさぶりをかける具体的内実は何か。さしあたりは、一見リアルでありながら切りすてている便宜主義を撃つこととしか抽象的に表現できないのが残念である。とにかく我々は一度はこの『タッチ』の世界を受け入れてみる必要はあろう。しかしどうしてもそこに残ってしまうものは〈規範〉の呪縛から離れることのできない教師としての我々の意識ではあるが。

研究経過報告

第2分科会では上記の課題について、文献講読を中心として研究を行った。尚、第3回以降は、第3分科会と合同で行なった。

① 第1回 7月5日(金) 都立新宿高校

酒井(新宿) 葦名(豊島) 水谷(秋川) 及川(江北) 斉藤(日大豊山) 影山(四谷商) 宮原(荒川工)の各先生方7名が出席。及川先生から『喫茶店のソクラテス』(新時代工房制作, 汐文社)をテキストとして、青年期の心理についてご報告いただきました。「先生はネクラだ」という生徒のことばにこだわり、授業ではマンガなどを使って、青年は人生を真正面から考えるという意味のネクラであることを自覚させたいとのこと。出席者からは自己探究についてさまざまな基本的見解が出されました。

② 第2回 9月27日(金) 都教育会館

伊藤(三鷹) 影山(四谷商)の各先生と富塚(荒川工)の3名が出席。

今年度から教壇に立たれた影山先生から、先生がまとめられた卒業論文をもとに伊藤仁斎について御報告いただきました。仁斎は朱子学の「理気二元論」に対し、「理」を否定し「気」を肯定する「一元気」の思想により古学派を形成した。仁斎の思想で秀れているのは「道」という最高価値を身近にしたことである。仁斎における「道」は、人々が往来するようなところにあり、それは人間の「性」に密接に関連している。そして仁斎にとっての「道」への至り方は、善い人間性の果てない拡張の中にみ、そのよりどころを「学問」とするのである。仁斎は、原典を改めて解釈することによって、一方では本居宣長に至る日本の国学に影響を与え、又一方では、中国古典の忠実な註釈者として、後世に偉大な業績を残したといえるのである。

〔第2分科会 参加名簿〕

影山洋(四谷商) 花井みさ子(白鷺) 井上勝(八王子東) 松本光正(本所工) 宮沢眞二(京橋) 水谷禎憲(秋川) 細谷斉(駒場) 及川良一(江北) 秋元正明(学大附) 岡田信昭(青梅東) 山口俊治(東大和南) 内田君夫(攻玉社) 和田倫明(田園調布) 宮原賢二(荒川工)

研究経過報告

都立八王子東高校 井上 勝

第3分科会は「文献資料による指導内容の研究」というテーマで、7回の研究会を行った。毎回多くの方の参加とレポーターの充実した報告と、そして、3時間を越える熱心な討論が行われた。特に、レポーターからは毎回貴重なレジメが提出されるので、参加者以外の方にも広く活用していただく為に研究例会の際に配布するという新しい試みも行った。会場は全て新宿高校同窓会館を使用させていただいた。ご多忙の中をご参加いただいた先生方、報告をしていただいた先生方、そして、毎回会場の使用についてご配慮いただいた酒井先生、連絡を担当していただいた増淵先生に、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

以下活動内容について報告します。

第1回研究会（6月18日）

酒井（新宿） 大野（水元） 葦名（豊島） 蕪木（九段） 紺野（正則） 佐藤（竹早） 幸田（玉川聖学院）の各先生と井上の8名が出席。水元高校の大野先生から笠原嘉『不安の病理』（岩波新書）を参考文献として、「不安の持つ意味」というテーマで報告をしていただいた。大野先生は学校において教育相談も担当しておられ、現実の諸問題を踏まえて不安の概念、不安の意味、そして青年期の課題などについて話していただいた。報告の後の討論では授業をどの様に展開すべきかということから問題を有する生徒にどの様に係るべきかについてまで様々な質問が出された。

第2回研究会（7月9日）

酒井、紺野、佐藤、宮崎（江北） 秋元（学大附高） 増淵（片倉）の各先生と井上の7名が出席。江北高校の宮崎先生に「青年期をどう扱うか」というテーマで、青年期の授業の導入として卒業生からの手紙を教材として使い、青年期特有の問題を指摘し、考えてゆく授業について報告していただいた。先生は身近な資料を教材として使うことによって授業を生徒にとって出来るだけ身近なものにする様努力されており、その際の様々な工夫についての貴重な報告をしていただいた。又、討論では参加の各先生が青年期の授業で使っている資料と授業展開について紹介するな

どし、特に、増渕先生から『全共闘』（KKブックス）、『まるでエイリアン』（有斐閣）などの本を紹介していただいた。

第3回研究会（9月10日）

酒井、宮崎、紺野の各先生と井上の4名が出席。「ルナンの『イエス伝』を読む」というテーマで、正則高校の紺野先生に報告していただいた。20数ページに及ぶ大変貴重なレジメをもとに、イエスを人間として理解するルナンのイエス観について詳細な報告をしていただいた。先生はアメリカ留学のご経験があり、又、キリスト教関係の翻訳もされており、キリスト教の様々な問題や日本的風土とキリスト教との相違などについて話していただいた。文化祭の準備などで出席者が少なく残念であったが、先生の報告はその後第4回の研究例会で研究発表という形でより多くの方々に報告する機会が得られた。事務局の配慮に感謝したいと思う。

第4回研究会（11月5日）

酒井、宮崎、紺野、宮沢（京橋）、皆川（京橋）、富塚（荒川工）、斉藤（日大豊山）、佐藤、三宅（砧田）の各先生と井上の10名が出席。始めに三宅先生より第2分科会の事情についての説明があり、以後第2、3分科会を合同で行うことが提案、了承された。続いて京橋高校の宮沢先生よりブーバの『我と汝』を参考文献として「出会いについて考える」というテーマで報告していただいた。先生はブーバと共にボルノーの教育学に関心をもっておられ、奈良での全国大会での「感話学習」の発表を聴き、授業においてどうしたら生徒が先哲の思想に出会うことが出来るか模索されているとのことであり、『我と汝』の内容と共にそれらをどの様に授業に応用するかについて報告していただいた。討論では各先生よりどの様にしたら生徒が活発に授業に参加する様になるかについての意見が述べられ、他教科にない倫理・現代社会の科目としての独自性・重要性が話された。

第5回研究会（12月7日）

秋元、紺野、宮崎、三宅、佐藤、和田（田園調布） 工藤（三鷹）、水谷（秋川）の各先生と井上の9名が出席。田園調布高校の和田先生より佐藤三夫『ルネサンスにおける人間の尊厳』を参考文献として「ルネサンスの人間観」というテーマで報告していただいた。ルネサンスは西欧近代の初めとして重要な時代であるにもかかわらず、教科書では経済的背景からの説明しかされていない点に疑問をもたれ、ルネサンス期に活躍したイノケンチウス、マネッティ、フィッチーノ、ピコなどの人間観を資料に基づいて報告していただいた。討論ではルネサンスは普遍的課題を有

するか否か、又、ルネサンスをどの様に教えるべきかなどについて活発な意見が出された。分科会終了後、全分科会合同で都倫研恒例の忘年会が行われた。

第6回研究会（1月28日）

酒井、紺野、葦名、斉藤、三宅、幸田、工藤、影山（四谷商）、増渕の各先生と井上の10名が出席。砧工業高校の三宅先生より朝永三十郎『近世における「我」の自覚史』を参考文献として「日本におけるルネサンス研究」というテーマで報告していただいた。ルネサンス、宗教改革の原動力の1つとしてキリスト教神秘主義をとらえ、プラトン、プロチノス、エックハルトという神秘主義の流れの中でルターと宗教改革を理解すべきであるとの報告をいただいた。討論では神秘主義と近代との関係、参考文献の題名の「我」とは何か、更に、『近世における「我」の自覚史』がどの様な時代にどの様な意味で読まれたのか、などについて活発な発言がなされた。

第7回研究会（3月4日）

酒井、紺野、斉藤、佐藤、葦名、三宅、小河（四谷商）、上村（清瀬東）、増渕水谷の各先生と井上の11名が出席。豊島高校の葦名先生よりM・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を参考文献として「現代社会科教育の中に如何にM・ウェーバーを活かすか」というテーマで報告していただいた。プロテスタンティズムの禁欲的倫理が如何に資本主義の精神へと倫理転換したのか、近代化＝合理化という必然的な流れをM・ウェーバーは肯定していたのか否か、そして、教科書の記述の客観性はM・ウェーバーの学問の方法と精神と異なるものでありM・ウェーバーの学問の方法の導入により授業はより生徒に親しみ易くなるのではないか、などの点について30数枚に及ぶ資料に基づいて報告していただいた。討論ではM・ウェーバーの社会学の特質、エトスとは何か、などの点についてマルクスとの相違を念頭に置きながら活発な議論がなされ、又、「私はどこまで耐えられるか、そこが知りたい」というM・ウェーバーの生き方を教員としてどの様に受けとめるべきかという点について多くの意見が出された。終了後、中村新吉（千歳丘）工藤両先生も参加され、1年間の反省の会を行った。

必修倫理の目指すもの

都立八王子東高校 井上 勝

1. 必修倫理への歩みと課題

1982年の指導要領の改訂により倫理社会が消滅し、多くの学校で倫理が選択科目として実施される様になったが、本校では必修科目として実施している。この間の事情、及び、その内容について記し、多くの方々のご批判を乞う次第である。

本校は1976年に「高校らしい高校」を目標にして開校されたが、「教科書を始めから終りまでやる様な授業はしないでしょうね」というのが「高校らしい高校」を目指した初代校長からの倫理社会へのメッセージであった。そこで、教科書の内容を説明した生徒に「理解」と記憶を要求する授業から脱却する為の様々な試みを行ったが、目指す所は読んで考え、その結果を表現することによって暗記中心の生徒の勉強観を変え、勉強への意欲を引き出そうということであった。この試みはいくつかの問題点を有しつつも基本的には有効であったと思う(1)。

倫理社会で確定した上記の方向性は倫理でも有効と判断したが、それだけでは十分対応出来ない事態も生じた。特に、学区の変更に伴い所謂優等生が多く入学して来る様になり、又、その様な生徒に應えるという理由で「進路指導」が強化された。この様な中で倫理が担うべき新たな役割として次の点が生じてきた。第1は、生徒の勉強観の貧しさである。生徒は「優等生」故によく勉強するが、その勉強のイメージは教科書の暗記を基本とする貧困なものであり、この為、途中で勉強だけでなく学校生活自体に行詰ってしまう場合が多い。それ故に、勉強のイメージを豊かなものに変革すると共に、〈知〉というものの有する意味、その全体像について省察することが不可欠である。第2は、「優等生」に特有の人間関係の貧しさである。高校という「優等生」集団に入った時、この貧しさは人間関係への疲労、孤立観となって現れ、勉強の行詰りと相俟って深刻な事態となる場合も少なくない。そこで学校生活の具体的な状況の中で人間関係の在り方(例えば「友人について」など)について省察することが必要である。以上の2つの問題は倫理の領域の問題であり、又、倫理以外の教科では扱い難い問題である。そこで、この問題に一定の解決を与えることが倫理に課せられた新たな役割であると判断された。そして、倫理社会で確定した方向性の中でこの問題に解決を与えれば、倫理の方向性は次の様に

なる。すなわち、倫理社会では勉強の幅を広げることを目指したが、倫理では更にこの方向性を徹底し、勉強の全体像を理解すると共に、その全体を構成する各部分を具体的なテーマを通じて生徒各自が省察することである。

2. 必修倫理のプログラム

以上のような経過を踏まえて現在実施している倫理のプログラムは次の通りである。

I. 〈知〉について

- A. 常識と学問 — 学校で学ぶ理由は常識と学問の間に次元の違い、壁があり、独力ではその壁を越え難いからである。
- B. 意識の逆立 — 常識と学問の壁とは意識が逆立すること、現象と本質とに分裂することであり、この逆立は対話、イロニーによって矯正される。この対話、イロニーこそが学問の方法である。
- C. 勉強の両義性 — 対話、イロニーは（善悪の）2面を有するのであり、そのどちらをどのような基準で選択するかが倫理の問題である。

II. 人間について

- A. 人間は社会的動物 — 人間は他者と関係し、他者の中に自分を写すことによって自分を理解し発展させるが、その関係は唯一ではなく多様である。
- B. 理性による他者への関係 — 他者への関係の仕方の1つが理性という人間に共通の能力によって相互に理解する方法である。この時、残余の部分は個性として理解される。
- C. 神を通じての他者への関係 — 理性を前提とすることが出来ない時、人間は神を通して他者に関係することが出来る。
- D. 感情の熟成による他者への関係 — 人間にとって最も自明な感情を長い間熟成させることによって他者に関係することが出来る。

III 近代市民の公教育として

- A. 市民の権利と義務 — 近代市民生活に不可欠なものである自由、個人社会、国家、民主主義の起源と概念。
- B. 人間の自然への係り — 近代科学の基本構造とその方法。

以上が倫理のプログラムであるが、これらを具体的な教材と関連させると次の様になる（記号は上記プログラムの記号）。

ギリシア哲学 — I A～C, II A・B

キリスト教 — II A・C

ルネサンス・宗教改革, 社会契約説 — III A

フランス啓蒙思想とルソー — II D, III A

近代科学の形成 — III B

ドイツ古典哲学 — I A～C, II B・D, III A

3. キリスト教を中心とする, ひとつの授業展開例

上記のプログラムの具体例として, 次にキリスト教を教材とする授業展開例についてその要点を記したいと思う。

キリスト教は「愛の宗教」であり, その根本は「神を愛せ」, 「自分を愛する様に隣人を愛せ」という2つの律法に要約されるが, この様な内容ならば本校の生徒は自ら教科書を読むだけで十分理解出来る。それ故に, 授業はこの様な内容を理解した所から始まる。

愛とはひとつの人間関係であり, この愛をどの様な人間関係に還元するかによって様々な解釈, イエス像が可能となるが, 少なくとも人類愛やヒューマニズムではない。この確認から授業は始まる。では, 愛の律法とは何か。それは神への服従の要請であり, 神に服従する人間が取り結ぶ人間関係から生じたものである(2)。この「神」という宗教的表現を吟味すると罪の問題が生じ, 罪は「隣人との係りの絶対性」という人間関係に還元される(3)。しかし, 無限定な隣人に絶対的に係ることは不可能であり, むしろ, 不自然な人間関係を強調せざるを得ない人間関係にこそ還元されるべきなのだ。すなわち, 隣人へ係わろうとして挫折してしまう人間関係である。具体的に言えば, 愛を貫くことが出来ずに裏切らざるを得ない人間関係であり, 又, 愛がむしろ「善意」によって誤解され, 反対物に転化し, 拒絶される場合などである。そして, この様な人間関係は私達の身近な所に数多く存在する(4)。この身近な人間関係をイエスの律法の論理によって考察し, 又, イエスの思想を身近な人間関係を例に考えることによってキリスト教を教材とする授業は生徒にとって身近で, 有用で有意義なものになると思う。そして, この様な理解を前提とする時, 初めて思想的な知識と理解の必要性が生じるのだと思う(5)。

4. 終りに

上記のプログラムはひとつの試案であり不完全なものであるが、特に、いくつかの重要な教材が欠落している。その欠落部分と欠落の事情は次の様である。

1. 現代思想 — 「現代」というものが特に最近不明瞭であり、どの様にして全体として理解し教えるべきか、十分教材化出来ていない。
2. 仏教・儒学など — アジアの思想は徳目化され易く、思想化することが難しい。この事情は日本の思想についても同様である。又、世界史上に有するアジア（の思想）の意義も不明である。
3. 日本の社会 — 日本民俗学の研究成果は社会科教育に不可欠であると思うが、倫理で取扱うべきか否か、又、研究成果として具体的に何を教えるべきか不明である。
4. 植民地理解 — 近代日本の思想家達が日本の植民地支配、アジアをどの様に観ていたか、又、植民地という問題を〈知〉のどこに位置づけるべきか不明である。植民地の問題は現代思想の不可欠の要素であり、現代思想の中で十分検討すべきであると思う(6)。

プログラムの他にも多くの課題がある。2単位という時間不足、教材・資料の開発の難しさという技術的問題と共に、「考える」、「理解」、「暗記」とは各々何かという様な教育活動の根本に係る問題がある。更に、倫理など不要という現代的問題もある。共通一次試験科目の変更に対応する為にとということで本校でもカリキュラムの改訂が検討され、倫理は選択科目とするという改訂案が提案されたが、辛うじて否決され、いま暫く必修科目として存続することが昨年末に決った。倫理の内容を深めると共に、倫理不要という現代的で世界的な動き自体を倫理的に検討してゆくことが、今後の不可欠の課題であると思う(7)。

- (1) この間の事情については拙稿「読むことと書くことを目指した授業の試み」(『都倫研紀要』第22集所収)を参照されたい。(2) ブルトマン『イエス』参照。
- (3) 八木誠一『イエス』参照 (4) 具体的な教材とその取扱いについては「50円あげてぼくとっても悲しかった」(『都倫研紀要』第22集P60)、及び、本年度第1回研究例会の際に配布した「好き友」(佐藤春夫)を参照されたい。(5) フルキエ編『哲学講義』第4巻参照。(6) ひとつの試論として拙稿「内村鑑三と明治国家」(『都倫研紀要』第23集所収)を参照されたい。(7) ジャック・デリダ『ヘーゲルの時代』参照。

「卒業生からの手紙」

—— 現代社会（青年期）の導入の資料に使って ——

都立江北高等学校 宮崎 宏一

1. はじめに

本年度は、久しぶりに第3分科会「文献資料による指導内容の研究」に所属し、都倫研らしい学習をさせていただいた。これも世話人の井上 勝先生（八王子東）増淵達夫先生（片倉）らのお力で、心から感謝申し上げたい。

さて本稿はその際（7月9日（火）17：00より）新宿高で私がレポーターをひき受けたときに用いた資料の一部である。分科会では「青年期について考える」という副題がついていたと思う。

『卒業生からの手紙』を現社の授業に使うことは時々あるが、本年は次のような授業展開資料を用いたので、手紙文を紹介するまえに簡単に「青年期」の授業資料をまとめてみた。

- 俳優、中村雅俊さんのオレの高校時代 — 運動して、勉強して、恋もした。
- 漫画家、里中満智子さん、中学生で漫画家を目指した。本気で生きがいを探してたんですよ。甘えてちゃ何にもできない。
- 東武動物公園長、西山登志雄さん、動物も過保護でボケる。科学で割り切れぬ子育ての熱意。飼育のコツは競争心をもたすこと。等

以上のように具体的な人物を登場させて、青年期の授業展開を行った。

2. 卒業生からの手紙（原文のまま）

（私のコメント）

ごぶさたしておりますが、お元気ですか。倫社の課題でもありますので、最近のこちらの状況、それに考えていることなどお知らせいたします。大学の講義は、いよいよ本格的になってきました。高校時代と同じように、英語には苦しめられています。週二回ですが、一度にどんどん進むので、予習が大変です。高校の頃から、せめて予習の習慣だけでもつけておけばよかったと後悔の気持ちはありますが、今更どうにもなりません。毎日少しずつやっついていこうと思います。

英語を除くと、ほとんど興味深い科目ですが、特に史学、

「倫理・社会」から「現代社会」への流れを生徒に話す。

どんな人間でも苦手なものはある。

地味な努力が大切だ。

学問、学ぶことのお

社会科学概論、憲法一部の三科目には魅力を感じています。

史学は家永教授の担当で「憲法を中心とした日本近現代史」というテーマです。現在、自由民権運動のなかでの国民が起草した憲法草案について、主に勉強しています。家永先生の「教育は宣伝とは違う」、「講義は決して私の見解を押しつけるものではない」という話は、教科書裁判のことともからんで、印象に残りました。家永先生の思想なり信条は、長い間の研究や体験から培われたもので、既成のイデオロギーを軽々しく信じ込むようなこととはわけが違うという気がして感動をおぼえました。

社会科学概論は『社会科学の再建』という本をもとに、社会科学のさまざまな問題を考えていくようです。担当の金原左門教授は、名前もユニークですが、人柄もなかなかユニークで、好感がもてる人です。

大学に入った以上、勉強を第一にして、特に1・2年のうちは、手広く本を読み、物事を考え、幅広い視野を身につけたいと思います。そうしないと浪人している人に申しわけが立ちません。幸福にも、わずか二ヶ月半の受験勉強で、第二志望とはいえ、一年間あこがれていた大学に、スルリと入ってしまったのですから。

サークルは、音楽研究会混声合唱団に入る予定です。これまで二度練習に参加して、近いうちに入部届を出そうと思っています。なぜ「合唱」かというと、ただ歌をうたってみただけのことです。「混声」というのも大きな魅力ではありますが……。とにかく、これまでやったことのないことに挑戦してみたい気持でいっぱいです。ちょうど、高校に入って「勇気をもって」山岳部に入ってみたり、何も知らぬまま（今考えると無責任ではなかったかと不安ですが）生徒会副会長になった時のような気持です。必ず、何か新しい発見ができるだろうと期待しています。

混声合唱団には、当然ではありますが女性もたくさんいま

もしろさ、魅力について……

真の教育とは？

他人志向型人間の傾向が増えている現象。三無主義・五無主義との説明に使う。

人間の最も大切な、人柄・人格・性格との関係（性格形成）。読書・教養・広い視野。一浪した私の体験も話す。

まず自分がほれこむあこがれるもの（目的）が人生に必要。

文化的・芸術的なものへの参加。性へのあこがれ……。

若いこの時期はやってみたいことへの挑戦が必要であろう。青年期は「不安」と「悩み」がいつもつきまとうものだ。

す。きのう練習を終えて、四年生の女の人と一緒に帰ってきました。(家が近いからです)やはり法学部法律学科の人で合唱をやりながら受験団体にも入って司法試験をめざしているということ。いろいろ話をして、なぜか感動してしまいました。やはり真剣に生きようとしている人は、どこか深い魅力をもっている、と思わざるをえませんでした。もちろん、男性でも素敵な人はたくさんいます。商学部の二年生で、公認会計士の試験をめざしている先輩は「会計学しか知らない会計士にはなりたくない」とやはり、いろいろなことを語ってくれました。なにかすごく嬉しい気分です。どうやらよき先輩にめぐまれそうです。

先日「司法試験について」という講演会をききましたが、たくさん得るものがありました。中央大学の学生は、法律についての断片的な知識はあるが、その他のことはあまり知らず、文章能力もすぐれているとはいえないという傾向があるのだそうです。そこで司法試験を受けるにしても、法律の知識はもちろんではあるが、それを裏付ける幅広い教養が、より大事なのだ、ということを強調されていました。まったくその通りだと思います。例えば民法の本一冊をとって見ても、難解な言葉だらけで、さっぱり理解できないのですから。この講演に力づけられたので、「自信を持って」広く勉強していきたいと思います。法律しか知らない法律家など、たとえ司法試験を通ったとしても、何もできやしないでしょう。

学校が人間の世界から隔絶された山の上にあるせい、講演会とか、コンサートとか、映画会などは、かなりひんぱんに行われています。講演会は学部が主催するものやサークルが主催するものがあり、前記のもの、家永教授の「教科書裁判最高裁判決について」というのに出てみました。30日には、金原教授の「歴史学を語る — 歴史を学ぶ意義と方法」という講演があって、ぜひ行きたいのですが、残念ながら都合がつかないようです。

先輩・異性に対しての尊敬の念。

真剣に生きること。人生、いかに生きるべきかの原点である。

学業とクラブ、文武両道、先輩と後輩などについて。

現代っ子の特徴ではないだろうか。

受験だけの勉強は、ほんとうの学問ではない。

自信をもって生きる。講演会・映画・演劇などを通して人間的な力をつけていく。文化的活動に積極的に参加していく姿勢。

また今日は、映画『いちご白書』を歌の文句にあったように「授業を抜け出して」無料でみてきました。残念ながら字幕が読みきれず（視力が悪いのは、つくづく悲しいことだと思います）、ストーリーがわからなかったのですが、クライマックスの場面では感動して、またもや歌の文句そのままに「涙ぐんで」しまいました。映画はこれからも時々やるようなので、機会をとらえて、なるべく多くの映画に触れてみたいと思います。

今日は初めてのクラスでのコンパがあり、大阪や長野や富山といった各地から来た人達といろいろな話ことができました。横須賀に住んでいて、米軍基地によく出入りしている女の子とか、変わった人もいるみたいです。いまのところ、毎日が新鮮な発見と感動でいっぱいです。

初めの頃は、わびしかった自炊にも慣れ、八百屋のおばさんとも知り合いになって、この前はチューリップをもらいました。片道二時間で自宅から通えるのに下宿とは贅沢ではありますが、このことは必ずプラスになると思いますし、勉強も必死にやって、わがママを許してもらおうと思っています。

なんだかダラダラと、とりとめのないことを書いてしまいました。どうやらばくも、中大生の一般的傾向のように、まとまった文章を書く力が不足しているみたいです。やはり文章は毎日書いていないと駄目なようですね。さいわい、ここには電話という「文明の利器」がありませんので、手紙を書く機会はふえると思います。

これからも、江北で学んだかけがえのないこと（忙がしい三年間ではありましたが、それだけのものは確実に得ることができたと思います。）を大切にして、さらに飛躍すべくがんばります。これからの四年間を、決して無駄にはしないつもりです。これからもいろいろとご指導くださいますよう、よろしくお願ひします。ではおからだには、十分お気をつけ下さい。 さようなら。 4月27日

ユーモアと自由さと
決断力……。

身体的悩みは、青年
期には大きな障害と
なる。

感情・感覚・フィー
リングについての話。

マスコミ時代特にテ
レビ時代に生きる若
者の現状。

友人関係（異性・同
性）について。

地域社会のなかで、
かわいがられる学生
さん。

親から離れての独立
生活。（精神的独立）
親への感謝。

一般的には、手紙を
書かなくなった。活
字メディアの低下。

高校時代の三年間を
今後の自分の人生の
為に、大いに生かし
ていこうとしている。

形式ではなく内容・
あたたかな心が伝っ

宮崎先生

てくる。

途中で紙を変えて申しわけありませんでした。

3. 手紙を終み終えて

これほど集中して、手紙に聞きいってくれたことは、いまだかつてなかったように思う。入学して間もない1年生が、先輩の手紙からさまざまなことを学びとったような気がした。あるクラスでは、手紙を読み終ったとたん、教室が割れるような大きな拍手が湧きおこり、読み手の私はなんだか胸があつくなってきてしまった。

途中で便箋がなくなってしまったのだろう、それでも一生懸命書きつづってくれたその飾り気のない自然のままの自分を出してくれた先輩に、なんともいえない親しさと尊敬の気持がクラス全体に満ちあふれていたようであった。

教科書の中での「青年期」は、ほとんど基礎的なことや青年期に関する調査結果がグラフ化されたり、若者文化的な視野でとらえられていることが多い。

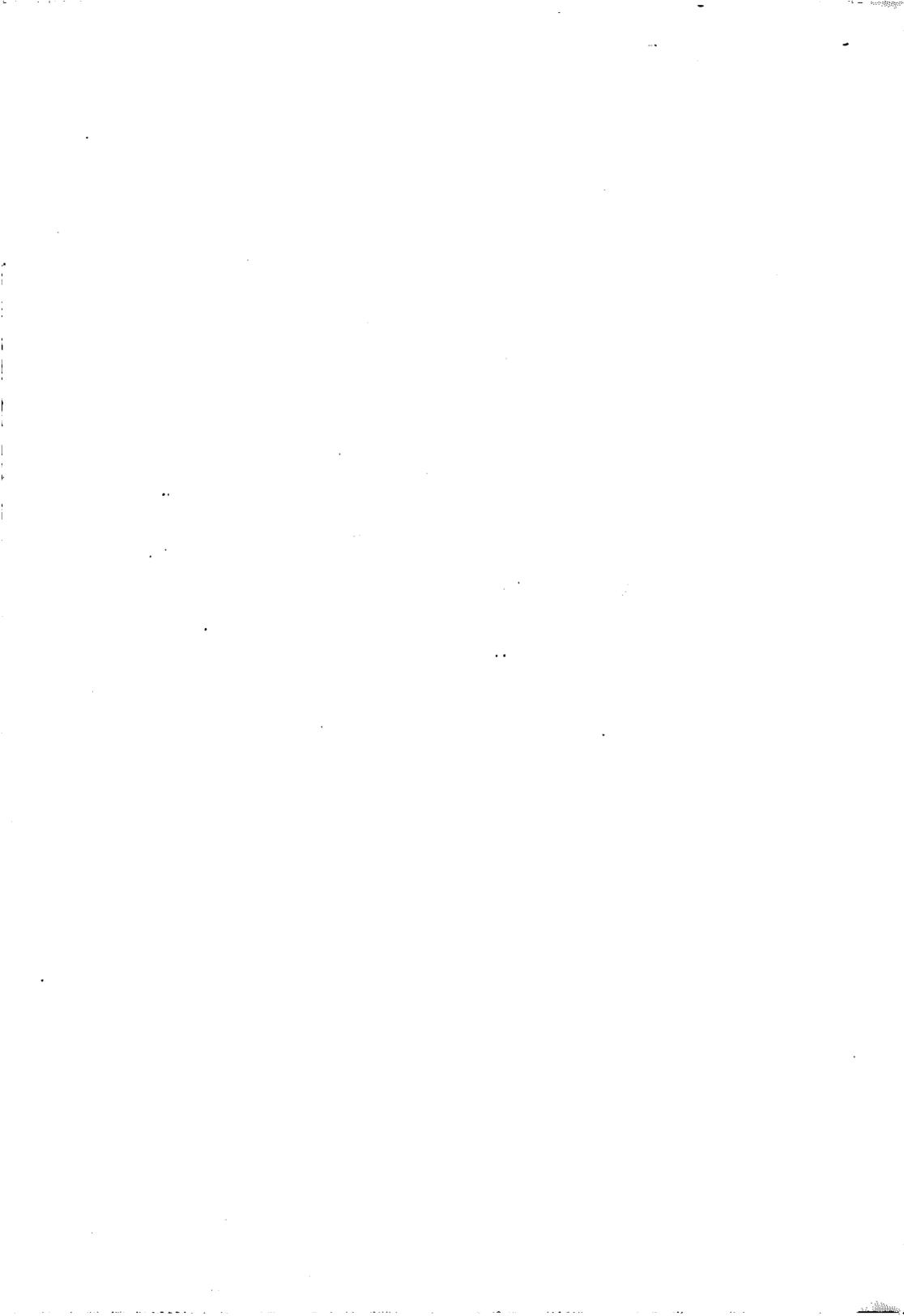
手紙をくれた先輩が、たまたま生徒会活動やクラブ活動に積極的で、悔のない高校生活を過ごしたその姿勢は、現役1年生としては、理想であり、あこがれであるかも知れない。一度しかない人生を、一度しかないこの青年期（高校時代）をいかに過ごしていくべきか。「現代社会」という授業を通して、一つの試みを行った。

手紙文の右横に、私なりのコメントをつけてみたが、どのことについても青年期にかかわる問題であり、生徒達との問答にも生き生きとしたものを感じた。

まもなく卒業式シーズンがやってくる。希望にもえた先輩たちが、どんな生活や体験をし、おとなになっていくのであろうか。とにかくどんな道に進もうが、精一杯努力し、頑張っているかが最も重要である。そのうちにまた、卒業生からいろいろな手紙が到着することであろう。それを待っているのも楽しいことのひとつでもある。

特 集

“ 現代社会私の試み ”



B. タウトの嫌ったもの

都立竹台高校 齊藤 規

「ワタン、カヘリタクアリマセン」とルドヴィヒ・ランゲは言ったが、それは外交辞令のように思える。滞日中には難解な日本語に悩まされ、Cunning German（ずるいドイツ人）と村人から落書されたこともあった。1939年、独ソ不可侵条約が締結されたときであった。時の平沼内閣は変転めまぐるしい世界情勢を把握することができず、総辞職。ドイツ人亡命者が居心地のよい場所を発見することは至難の技であった。黒沢明の「達磨寺の独逸人」はブルノー・タウトを主人公にした脚本である。

ルドヴィヒ・ランゲ、つまりブルノー・タウトは1936年、滞日わずか数ヶ月でトルコへ去った。イスタンブール工科大学教授、トルコ政府建築最高顧問の待遇での招聘である。1933年5月4日の敦賀上陸から離日までタウトは建築家として実に不遇であった。だが、日本文化について数多くのメッセージを残してくれた。日本文化を考えるさいのきら星の如きメッセージである。もっとも、タウトの発言は第二次大戦前夜のこともあり、ナショナリズムの潮流の中のみで評価されてきたきらいがあった。たとえば、桂離宮の評価と日光東照宮の拒否は天皇趣味の將軍趣味に対する優越とされたようにである。この種の誤解は2つの意味で不幸を招くことになった。なぜなら、桂の美しさは確かにその主人である八条宮智仁親王の意向が強く反映されたものであった。「白氏文集」の中の住居観、「源氏物語」の王朝文化の影響によるところが多い。だがこうした特殊な歴史的背景の説明をまつまでもなく、桂自体に造形的な美、「数学や思惟の規則などでは理解できない釣合いの秘密」があり、それが桂の美を普遍的なものとしている。こうした普遍的なものを看過する恐れが生じてしまう。2つめには、タウトの発言は天皇趣味の賞讃ではなく、桂の中に建築家タウトが年来求めていた理想を発見したがゆえの発言であった。タウトは常に建築家として鍛えられた眼で日本を見ていたのである。「眼は思考と芸術との、或は哲学と現実との媒介者である」（「画帖 桂離宮」）眼が思惟する。タウトはよくこのことばを使う。この小文ではタウトのめざしたものと、嫌ったものを略記して、日本文化を考える際の糧としたい。

〔ドイツ時代のタウト〕 ブランデンブルク選帝侯フレデリック3世のプロイセン

王即位を祝して命名されたというケーニヒスベルクに1880年、タウトは生まれた。偉大な思想家がすべてそうであるようにかれも社会の大きなうねりの中にその思想的営為がなされていった。タウトとその時代を決定づけた要因をあえて次の3点にしばりたい。①資本主義的生産力の驚異的進展 ②第一次大戦とロシア革命 ③共和国の崩壊とナチスの抬頭、である。

①タウトは1900年、20歳でベルリンに出、建築家として勉学を励む。その成果が1923年「鉄のモニュメント」と1914年「ガラスの家」となった。それらは鉄材による架構、支持構成を追究、また、壁、階段、丸屋根、すべてガラスという素材革新による建築思想の革新であった。この近現代の建築素材を大胆にとり入れたデビューは、かれに新たな哲学的問いを課した。自然と社会とのかかわり方をどのようにすべきかというこの問いかけは、生産力の未曾有の発展の中で解決をせまられているものであった。精神的なものが第一で、自然は二義的だとする表現主義的なトータルな反抗に共鳴するとともに、タウトはクロボトキンやイギリスの田園都市運動に関心を示していったのである。人間と自然との関係の豊かさをめざす思想の萌芽をこの時期にみることができよう。

②「ガラスの家」の設計は第一次大戦勃発の年でもあった。兵役をのがれ、かつ戦時中では満足な仕事もなく、タウトは空想の中で自然と建築の共存をめざすことになる。アルプスの山々を彫刻のようにけずり、ガラスのドームをかぶせ、氷河にガラスの宮殿をたて、はては小遊星の中をえぐって鉄とガラスの装飾をつけ地球のまわりをまわらせるなど、建築の可能性とあり方を模索している。この「アルプス建築」と同様、「都市の解体」という著書も、近代都市環境から建築の解放をめざしたものであった。

ロシア革命と労働運動の進展。それは息子ハインリッヒ・タウトの言をかりれば「集団的民主主義的行動の母胎」の出現を意味した。建築家として実り多い7年（1924～31）にかれは最高の創造的活動をなしたのである。労働者と大衆の関心と要求のなかで建築にとりくむ一大事業がはじめられた。マグデブルク市で建築実務責任者を経験し、ベルリンでは多数のジードルンク（住宅団地）を設計した。この間の目標は明らかであった。人間の共同生活を一層調和のとれた、人間にふさわしいものとする。こと。「諸芸術の母」である建築によってこの世に美をもたらすこと。これはまさに倫理的な確信ともいえよう。こうしたヒューマンな活動は当時のドイツ労働運動の高揚が背景にあったことはいままでもない。

③ 1932年、モスクワ都市計画に参加するためのソ連行。その間、ナチスの権力奪取とともに身の危険を察知し、逃亡の決意をする。大胆かつ進歩的なものをナチスは嫌ったからであった。スイスに一旦のがれた後、日本インターナショナル建築会招待をうけて、シベリア経由でウラジオストックへ、航路、敦賀に上陸した。1933年5月3日のことであった。

〔日本でのタウト〕 上陸翌日、タウトは桂離宮に、5月21日日光東照宮、6月18日修学院離宮、10月1日伊勢神宮などめざましく動くが、建築家としての手腕はふるえなかった。当時の日本にはまだジードルンクに関するタウトの豊かな経験を生かす現実的基礎はなかったし、まして準戦時であればなおさらのことであつたろう。かれの焦燥、不満感はつり、異常に感じやすい人間としてふるまったことであらう。日本文化に関する種々のメッセージは其中で書かれたものであり、以下にタウトの見た日本の嫌いな部分をかかげて、その意図するところを明らかにしたいと思う。

場 所	記 事
下 呂 駅	俗悪な停車場……だらしなく使われている石。いずれもざらにあるいかもの。
長瀬旅館・高山	物音、厠臭
小坂旅館・白川	騒音と厠。家全体が一つの部屋。見た眼のみの仕切(障子)
亀屋旅館・太田	風情のないいかもの。人が勢いよく動くとゆれる室。騒音
富 山 県 庁	俗悪きわるもの、建築術や都市計画に少しも関心がない。
新 潟 県 庁	宮殿風。もちろんいかもの。重苦しい。
山長旅館・佐渡	厠、建築は単純で古い。一つの部屋に床の間が二つある。
佐 渡 の 道 路	到るところ穴だらけで、世界悪路競争に出場したら一等賞
大黒屋・湯野浜	ニスを塗った用材。すさまじいばかりの床間。いかもの。
石橋旅館・秋田	「大名」風旅館。ローマ風のいかもの趣味の浴室。急勾配の階段。低い戸、頭をぶつけてしまった。
弘 前 市 街	ブリキ製の西洋建築。裁判所、兵營、市役所、公会堂、郵便局。関東大震災後、東京から大工が持ち返ったもの。
東 奥 館・浅虫	稀にみるいかもの最高頂。代表的ないかもの。何とも形容のしようがない。ヨーロッパ式、英国風。いんちき。

(注) 旅館名は笹間一夫「今昔『飛騨から裏日本へ』」による。

(注) いかもの(如何物)(独Kitsch)は芸術たることを欲しながら遂に芸術たれないような芸術のことであり、「いんちき」Tinnefは一種の詐欺、ごまかしをあらわしている。後者の評価のほうがもちろん厳しい。

1935年、タウトは飛騨から日本海側へ抜け、新潟、秋田、青森と旅する機会を得た。その旅日記からの引用が上表である。これを見ると建築家タウトは2点に注目していることに気がつく。その1つは住み心地ということで、建築物の力学的構造はもとより、細部にわたっても厳しい注文をつけている。宿舎の旅館では、部屋の隔絶性、騒音、通気、悪臭の有無をとくに問題としている。第2は建築美。たとえば、富山、新潟県庁舎を酷評しているが、共通する外観は、ファサードの中央を縦線で強調している、左右対称で中央に大仰な車寄せ、入ると大広間、大階段、1階の外壁は花崗岩仕上げということである。ここにみる中央部縦線の強調は、権力を誇示し、威圧感を与える役割をしている。タウトはそれを極度に嫌った。「地上における調和は芸術、ことに建築の美によって作り出される」との確信をもつものとしては当然のことであろう。だから、中央部縦線のない秋田県庁舎は、イギリス植民地風で素朴で良いとした。かれによれば、建築とは美の現実化であり、「良き交わり Gutes Gesellschaft」を生み出すものであって、それ以外の目的をもたせてはならないのである。いくつかのエピソードがそれを示しているので、紹介してこの小文を終ることにしたい。

その1。タウトは1932年にモスクワに招聘されたが、かれの都市プランは不採用であった。戦争前夜に必要なとされたのは古典主義的装飾をともなった、国民を鼓舞しうる堂々たる建築であった。かれは、モスクワを去り日本にむかうが、それは前述した。その2。かれは日光東照宮を嫌った。「過度の装飾と浮華の美」は建築を利用して将軍の威を示すだけのものと考えたのである。同時代の「素朴で合理的で、しかもすぐれて美しい」桂離宮はアンチテーゼとして絶賛されることになった。その3。桂離宮が賛美されたのは天皇趣味を是としたためではない。東京の中央郵便局(吉田鉄郎設計)をモダン、国民的とし、軍人会館(九段)を拒否したことからもそのことは理解できよう。外部にくだくだしい造作をつけて、それで日本的建築と称するのは、「いかもの」ではなく「いんちき」とかれの眼にはうつったのではないだろうか。

林 竹 二

都立秋川高等学校 水谷 禎 憲

1

林竹二が亡くなった。彼がわたくしたちに与えた最大の教育上の概念は、「授業」は、教師にとっては教師みずからが主体であり、生徒にとっては生徒みずからが主体であるという微妙なバランスを組織するものだという概念だと思える。そして、教師の重要な資質の一つに、可能性という子どもの主体性に委ねられた授業の成立の要件と、教師における教材とまたその背後にある「教えたこと」との関係において、生徒の自助努力の意識を発見していくことである。山の極みにまで自力で登ろうという生徒の可能性を引き出すために、授業は一種の学問的^{ww}追求の陰影を帯びはじめる。

林竹二からみると、授業は教える側にあるのではなく、生徒の側にあるのだという発言・発表中心の方法は、今日の選別振り分けの構図の中に生徒自身の動きを介して、すっぽりとはまりこんでしまう。あたかも教師の罪障感の無意識的な忌避に他ならなかった。彼の中で、ただ「生徒」は大切な存在だと繰返しているだけの援助主義的なうすっぺらなヒューマニズムの一般化が、どれだけ問われていったかはかり知れない。

彼は、わたくしたちの間に、授業は現実のたくさんのなまの生徒達の学びたいという意志が、いまから100年程前に産み出された「教化」としての制度に仕組まれてしまい目立たぬように日常化してしまった行為である事を明らかにしてくれる。授業は「学ぶ」場である事を強調する。しかも、彼は現実とのギャップ（「水俣の海」のたとえ）そのものの上に視座をおく。授業が方法や形式であるうちはいかなる実践的努力も呪縛を強めるだけである。授業の質、内容が問われねばならない。

林竹二が授業を実現しえたのは、彼の「教えたいもの」と生徒の学ぶことの意志との出会いである。この出会いに彼は深い必然性をもってとりつかれていたとでも言う他ない。ただ、今日の時代的狀況をして彼にそれが促がされたのだとすれば、それは少くとも時代の病として教室にみずからの墓碑を建てることによって、「哲学」というものが、じつは「死の練習」であるといったソクラテスの主張（『若く美しくなったソクラテス』）が林竹二そのものの事であった事を証していよう。

自分自身を鑑みても、今日、教師は授業をつくりあげるための産みの苦しみを、少なくとも新卒教員でもなければさほど持っていない様に感じる。そんな事よりも時間つぶしに似たあまり本質的ではないと思われるような雑用やら事務やら計算やらに時間をとられている。教師は、既成品を前に置いてああでもないこうでもないと言いたて、産みの苦しみなど知らずに過しているといってもよい。林竹二の授業が一つのスタイルだとの思い込みが彼への誤解を生じさせている。林竹二には、そんな通念がどこにも成立する余地のない授業をはじめて出現させてみせた。「授業」は、教師の「教えたいたいもの」をめぐる演じられる出会いのドラマと言えよう。

生徒が学ぶという事は、教師が学ぶという事であり、学びの経路が辿られる。「学びたいこと」の意識を扱いかねて、通常の授業の中では学ぶという行為がうまく成り立たず、拒否かあるいは乱暴な振舞いに及んでしまっている人物たちは、「学びたいこと」を増幅させるという事自体には少しも情熱をかたむけてはいない。生徒の学びの意志と、教師の教えたいたいこととの授業からの遊離と、過剰な知識の羅列が惹き起す現実を前に、彼らの「学びの意志」はむしろこのいわば制度的な欠陥にのたうちまわるところに、自分達の自足を求め変質をとげてしまったようだ。そこで、林竹二は授業によるカタルシスを言う。生徒達は授業への深いはいり込みと共振から林竹二の教えたいたいことの極みをいわば生理的な鋭さをもってとらえる。ここで林竹二の授業は、生徒の内部の動きを主題化してゆくのである。生徒の自己解放の働きを感じる。生徒が変わるという事である。

2

林竹二が授業をした。授業ができた。ここに既に実に彼自身ではない別な授業の組織者達がいた。この事を取り上げねばならない。

林竹二は授業の導入を重視する。教室の中の生徒達を「授業」の中に連れ込んでいかなければならない。彼が50分の授業のうち40分を導入に使ったとする。その40分の前に何時間も何日もの導入が実は漢川でも尼工でもあったのである。授業の中に子ども達を連れ込む前に教室の中に連れ込む導入があったのである。教室の中に連れ込む導入の前に学校の中に連れ込む導入があったのである。林竹二が、「教師が授業を組織する」という言葉の中には林竹二の組織の及ばない、教師と生徒との出会いがあったのである。自覚的とは必ずしも言えないかもしれないが、生徒達が学校を生きる場にしていて、何らかの可能性を信じていたにちがいない。どんなに何をわめこうが、来ない者は来ないのである。来るところには、それでも尚生徒

1.1

の自発的な働きがある筈である。背をそむけた生徒達が、林の「授業」をうけに来る。それは、ひとりですることができる事ではない。その事は、彼の湊川とのかかわり以後（1977年から）の中で記されていく。林竹二は象徴的にそれを語る。Pedagogueの語源を示す行である。「子どもを連れていくもの」である。「子どもたちの「側」についていてやる」（何人かの生徒の場合は、追っかけまわし、つかまえる仕事のくりかえしでしょうが）ことからしか、教育は始まらないのだなということ、私は湊川や尼工にはいって、改めて考えさせられたのです」（「教師には2つの源流がある」）。だから、魂の世話という事からしてソクラテスは実際のところこの流れを汲む存在なのでしょう。

今、林竹二に問われている事は、一方ではわたしたちは、教室へと生徒を連れ込む事で疲れ切ってそこで終ってしまっているのではないかということ、他方ではわたしたちは、十分に調教された生徒を前にソフィストとして君臨し、パイダゴゴスの営みを忘れてしまっているのではないかということである。

3

ここまで、林竹二の下手な言い換えをしてきた。こんな事は彼の著作を読めば大概はわかろうというものだ。それでもさらにあえて記しておきたい事がある。それは、林竹二が語ったという事実である。一冊や二冊ではない。十数冊の著作、対談である。脳血栓で倒れた後も一体何回の授業をしたのか。（湊川は倒れたあとだ！）孤立を恐れる事なく、誹謗中傷もあったろう、同じ事を、本当に同じ事を（後に障害児教育に触れて少々「糺して」はありますが）言い続けたという事それ自体である。一介の教師ではない、国立の教育大学の学長がである。私がここに何かを書く事などよりもはるかに勇気のいる事である筈だ。彼の立場からすれば、一介の教師が、うちの学校は水俣の海になってしまっているじゃないかとか収容所ではないかとか職員会議で発言するよりもはるかにしんどい、厳しい事であったにちがいない。その上、文部省は批判し、教育委員会は批判し、現場管理職は批判し、現場教師は批判し、組合は批判してである。林竹二から何かを学ぶ、彼の思想を理解するという事は、自からの状況の中から考えつづけ、語りつづけるという事である。彼が問いつづけたものを著作と為したという点こそが林竹二の思想理解の前提である。彼の著作を読み描かれた状況をただ理解するというだけでは、あまりにも貧しい。彼の授業は模範授業ではないのだ。彼を理解するには、林竹二がどの様に活動し生きていたかである。それは、われわれがわれわれ自身の状況の中から学びそして語

りつく事である。拱手傍観，だからといって何も林竹二の言種を真似て済むものでもなからう。自己のかかわる状況を深くとらえないかぎりは拱手傍観に等しい。

4

私と生徒との「授業」におけるはじめの出会いの儀式は、「アマラとカマラ」の話ではじまる。もちろん，林竹二のそれとは似て非なるものだろう。一年間の授業全体の導入のつもりである。とりたてて生徒が変わりもないだろう。ただ私のこの授業は生徒には大変奇異に感じられるらしく非常によく覚えていてくれる。一年間の最後に一つだけ印象に残った授業はと問うと何人かがこれを指し示す。何かのうちに，授業の端々で例として「アマラとカマラ」に触れると必ず生徒達は覚えていてくれる。それは授業の微笑として示される。「ああ，あの話」といった感じ。1年生の現代社会のいちばん最初の話が，3年生の政治経済の中でも立派に通用してしまうのである。これには少々驚かされるとともに，楽しくなってしまう。別に林竹二を真似るつもりはない。私には彼の為した十分の一の働きもないであろう。本稿1～3は，その意味での私自身の追悼の意である。

もう一つ余計な事を述べておこう。林竹二は「ソクラテス」と「田中正造」なのだという点である。谷中村^{やなか}に入る。中^{はい}に入る^{はい}そしてその中でその中の人々から学んでいく。さらに「若く美しくなったソクラテス」という文言は，或る意味で非常に象徴性を帯びている。この2人の生き方を確かめる事によって，林竹二の「生」は自ずと一定のベクトルを持ち始める。「亡国に至れるを知らざれば，これすなわち亡国」。常に流れる通奏低音^{グランドバス}が，この2人である。「あんなに妥協がなくていいのかと思う人もいた」そうだが，林竹二に生きている「ソクラテス」や「田中正造」を不幸にも知らずにいたのであろう。

谷中の真相，人心危険なり。如何なれば，無知識なればなり。実に生は去るに忍びざるなり，而も来る十一日は公判に出でざるを得ず。一身の事は塵よりも軽し。去るに忍びざるは，此人道に救い得ざる道の為に悲しむ。嗚呼去るに忍びざるなり。凡そ人民の築ける仮りの堤を，官吏の手を以て破る。破られて怒る人民なし，国家なし，県民なし，大小議員なし。……今の国家社会は何の国家社会なるか。只百鬼国賊の横行を見るのみ。此間に居る無知識無気力の人民，之を奈何して保護すべきか。誠に去るに忍びざるなり。（木下尚江『田中正造の生涯』，林竹二「抵抗の根」『田中正造 — その生と戦いの「根本義」』所収における引用）
余計な事を書いてしまった。冥福の祈り，諒とせられよ。

『現代社会』私の試み

片倉高校 増 淵 達 夫

学校行事を通じた授業

私は今年度、3学年担任ということで『政治・経済』（本校では3年生必修）と『倫理』（3年生選択）を担当しており、ここに書く実践報告は『現代社会』についてのそれではないことを予めお断わりしておく。

私の担当する学年は、3年生の4月に萩・津和野・広島方面に修学旅行を実施した。テーマは「自然が作ったもの、人間が作ったもの、そして人間がそれらを一瞬にして破壊したもの」であった。事前学習段階で各班が研究テーマを選択し、それを調べレポートにしてレポート集を作成した。これを本番のガイドブックにした。教科の枠をこえて担任団も担当を決めて各々の調査の指導を行った。できあがったレポート集を各クラスで発表し、担当教員が採点をしに教室を回り、最優秀レポートをテーマ各々一つ選んだ。広島班のレポートはどれも「被害者としての広島」ばかりが強調され、加害者としての視点が抜けているため授業で少し生徒達の頭をかき回してやろうと考えた。

修学旅行では我々の班（学年を2つに分け逆コースをとる）は、秋芳洞・秋吉台→萩→津和野→錦帯橋→宮島→広島というコースで3日目に宮島に入った。宮島では、宿の女主人が被爆者であり、夜、生徒たちに当時の様子を話してくれた。実際に被爆者から生の話を聞くのは迫力があつた。翌日は広島へ。資料館には目をおおいたくなるようなものばかり。備えつけのノートに何人かの生徒が一生懸命何か書いていた。学校に戻ってからすぐ感想文を書かせた。秋芳洞に対する感動と広島での驚き、怒りを綴ったものが多かった。ここでもやはり、彼らの意識は被害者意識にとどまっていた。

政経の授業でも初めは日本が戦争でいかに大きな犠牲を払ったか、いかに悲惨なものだったかを強調した。そして次に『はだしのゲン』の一部をコピーしたものを配布した。私がコピーしたのは、ゲンの父親が子供たちに朝鮮人を差別してはいけないと教えているところと、ゲン一家と親しかった朝鮮人とゲンが話をし、ゲんに朝鮮人が受けた苦しみを語っているところである。勿論、生徒たちも知識としては戦争によって被害を受けたのは日本人だけではなく世界中の人たちがそうだったの

だということは知っていた筈だし、日本が朝鮮などに侵略し、多くの人々を苦しめたことを知らなかった筈ではない。しかし、単なる知識を越えて、現在も差別的な意識が残っているということや日本人が犯してきた誤ちをハッキリと認識させなければ現在の平和問題を話したことになると思った。戦争というものが人と人との肉体的な殺し合いだけでなく、精神的な殺し合いであり、人権侵害の最たるものであることをヴィヴィッドに認識させたいと思った。さらに五味川純平の『人間の条件』の話をし、朝鮮人強制連行や創氏改名などの話をした。これらの話を通して現在の差別問題、そして平和都市（である筈の）広島のかかえる矛盾など一学期の約三分の二の時間を費して人権問題、平和問題を考えさせた。

二学期には文化祭で修学旅行委員会企画による修学旅行発表を行った。委員会もやはり秋芳洞班・萩班・広島班など6班に分かれて発表したが広島班のものが一番の力作であった。ボール紙と調理用ボールを使って「リトルボーイ」の模型を作ったり、茶こしとハリガネで原爆ドームを作り、原爆投下前と投下後の広島市の地図を作った。今迄、文化祭などの行事は生徒が自主的に企画することが殆どなく、教員の強力な後追しがなければ何もできなかった生徒たちが「先生、原爆の模型を作りたいのですが」と自ら言って来て自分たちで計画を立て、夏休みにも学校に来て図書室で調べたり準備したことはとても嬉しいことだった。

このように書くと大成功だったように思えるが、果たして私の意図したことが、どこまで伝わったのか自信はない。私の一人よがりにならなくなってしまったような気がする。修学旅行委員の活動にしても委員が各クラスのいわば行事に関する精鋭メンバーだったからこれらのことが実現できたのだと思う。また、本校にも日本人名を名のっている在日外国人が少なからずいる。彼、彼女たちは私の話をどう受けとめただろうか。今回は政経の授業でこれらの話をしたが、現在ではどうなるだろうか。実のところ現社と政経の差が私にはよくわからない。生き生きとした形で現実の社会を見つめさせる点では同じだと思うのだが…。さらに今回の内容を3年生にはではなく、1年生相手だったらどうだろうか。1年生に同じようにして広島を見せたとして、同じように話ができただろうか。1年生にこれらの問題を提示し、「さあ、こういった問題が何故起きたのか歴史を見てみよう」と言って日本史や世界史の授業を待つのも一つの方法だろう。だが、本校の生徒のように学力的に能力が低く、知的好奇心を引き出すのに苦勞するような生徒たちに、こういった問題を歴史の授業を受ける一つの視点として持ち続けることができるだろうか。私には、本校の生

徒たちのように大学に進む者は全体の三分の一から四分の一で殆どの者が一般教養を学ぶ最後の学年であるからこそ考えさせなければならない問題だと思うのだが…そして実際に現地を見たという重み。この重みには私の話などとても比較にならない。実際に見るということが、社会科の授業の中で生かせたら、もっと幅広く、豊かなものになると思う。

成功か失敗か、そんなことはわからないが、行事を通しての一年間の授業は、私にとってはとても貴重な経験であった。

参考文献

中沢啓治 『はだしのゲン』(汐文社) 1巻P69～P74

7巻P42～P48

五味川純平 『人間の条件』(文春文庫) 2巻P14～P26

林 慶植 『朝鮮人強制連行の記録』(未来社)

金 一勉 『朝鮮人がなぜ「日本名」を名のるのか—民族意識と差別—』

(三一書房)

「情報社会の問題 —過熱する事件報道を対象にした授業実践—」

都立千歳丘高校 古澤英樹

マス・メディアによって提供されるおびただしい情報を、どのように受けとめ、判断したらよいか。このことについて学ぶ重要性は、いくら強調してもしきれない。マス・コミの影響力は非常に大きく、自分の意識がそれに左右されがちであるにもかかわらず、これを自覚している高校生はかならずしも多いとは言えないからである。現代が高度に発達した情報社会であればあるほど、マス・コミに対してどのように接するとよいかを学習し、考えさせる機会を設けることは、社会科の教師の大きな責務であると言っても、過言ではない。私自身、マス・コミの問題を授業化する試みをこれまでつみかさねてきたが、ここでは、1984年1月以来、週刊誌・テレビ・新聞などによってセンセーショナルにとりあげられた、いわゆる「ロス疑惑」報道を素材に、〈報道の自由〉と〈人格権—名誉・プライバシー〉の関係を問題にした授業実践について、生徒の感想文をまじえて、報告したい。授業は、渦中の人物・三浦和義氏逮捕の二ヶ月後（85年11月）に3時限構成で行なった。

〈授業を通じて、生徒はどう考えたか〉 まず、感想文④、⑤を紹介しよう。

- ④ 「授業を受ける前は、三浦事件については三浦さんがしきりに自分は犯人ではないとさげんでいたけど、そんなのは演技だし、報道も三浦さんの過去を出して犯人だときめつけていたので、なんて悪い人だと思っていた。保険金をかけて人を殺して、そんな人間ではない。外側は人間でも中味は人間ではないと思いました。犯人なのはわかりきっているからはやく警察につかまればいい。はやくこんな事件は解決してほしいとテレビなどを見てじれったく思い、逮捕されたと聞いて、やっとつかまると喜んでくくらいでした。／でも授業をうけてからは、マス・コミが三浦さんを警察に逮捕される前から犯人扱いしていたこと、過去をあることないこと表に出してしまったこと、三浦さんのまわりの人々がどれだけ傷ついたか、いろいろなことを知り、こういった報道はやっぱり問題があると思った。」（落合恵子）
- ⑤ 「私は授業で三浦さんの事がとりあげられる前は、三浦さんの事をとってもひどい人だと思っていました。……けれども授業を通して、とても大切な事を知りました。『マス・コミの力』にびっくりさせられました。というよりもおそろしくな

ってしまいました。テレビや雑誌などは、視聴率などをあげるために、視聴者が知りたがっているからといって、犯人扱いしたり、プライバシーを侵害してもよいのでしょうか。三浦さんだからといって、事実とはいえ、何を書いてもいいのでしょうか？……もし、自分達がF・F雑誌〔写真週刊誌〕などにのったらどうするでしょう。自分の事じゃないから、笑って見てられるけれど、自分がそうなったらどんな気持ちでしょうか。いくら読者などに好奇心があるとはいえ、プライバシーをさぐるのはやりすぎだと思います。個人を犠牲にし、商品価値が高いとか、プライバシーを商品として売っているのです。……週刊誌850ページにも及ぶほど書いたり、取引先におしかけるほどひまがあるのなら、もっと重要な政治や経済に目を向けるべきだと思います。……三浦さんが本当の犯人であっても人を裁くのは裁判官であって、マス・コミは有罪と決めつけてしまったりする態度は良くないと思います。そうやって犯人扱いするのはその人が社会復帰しにくくなってしまふと思います。もっと犯人を尊重して、人権侵害をしないように、本人にも家族の環境のためにも匿名報道をしたり、新聞がへんな事を書かないように自分達の中で人権問題や記事が正確か公正かをチェックできるようなプレス・オンブズマン制度を加えるべきだと思います。好奇心で他人のプライバシーを知りたがっているために、マス・コミもつけあがって（F・F雑誌が300万冊も売れたように）どんどん売りこもうとするのです。だから、私達は、マス・コミにおどらされないように警戒しなければならぬと思います」（中村恵子）

授業をうける前と、後とでは、社会認識の大きな変化が生じている。これは、今回の授業をうけた生徒約三百人（七学級）の大多数に共通してみられる社会認識上の転換なのだが、ここでことわっておきたいのは、テレビ、週刊誌等の過熱報道にさらされ、それをうのみにしていた生徒たちの認識を転換させるために、授業者の方から一方的な注入を行なった結果、といったものでは決してないということである。それでは、何かと同じ、意識操作であって、授業者の意図に反するのである。では、認識の転換をはかるために、どのような認識装置の組み立てをしたか。

〈授業構成の視点と方法〉 一見きわものめいた「ロス疑惑」報道を素材に、授業を試みたことについては、実は、意識的なねらいがあった。それは、(1)報道（表現）の自由は、憲法で保障され、民主主義の根本をなすものであるとはいえ、人権を侵害しないための限界があることを、抽象的にではなく、生徒自身も関心をもつ具体的事例を手がかりにして認識させること、(2)プライバシーの権利をはじめ、人

権について、「与えられたもの」といったふうにとらえるのではなく、動的な社会状況において、それがどのような意義をもつか、その現状は如何なるものか、今後の課題は何かを考えさせよう、それもほかならぬ自分自身の問題として、主体的に考えさせよう、というねらいである。「ロス疑惑」報道を材料にする場合、メディアによってつくられてしまった幻影（イメージ）に左右されたり、狙上へのせられた三浦和義氏個人の事で、自分たちには関係のないことといったうけとめかたが予想された。そこで、授業化にあたって、ビデオ教材や読みもの（プリント）などで具体的なイメージをもたせ、問題がどこにあるか気づかせるようにつとめた。

〔第1時・コンピューター時代におけるプライバシー〕ビデオ教材「あなたはここまで知られている」（NHK総合テレビ特集番組・録画）を視聴させ、総理府世論調査（「電算化時代・プライバシーに不安」、朝日新聞85・10・28付）によって国民の意識の現状を確認し、〈情報の商品化〉と〈プライバシー権〉について理解させた。この授業で考えたことについて、生徒はこう書いている。

◎ 「情報処理会社は様々な手段で集められた情報をコンピューターでインプットする。コンピューター地図会社では、航空写真から個々の住宅の平面図を写し出しその土地や建物の大きさ、古さ、家庭の事情や持っている車のメーカーも色別でわかるようになってきている。そればかりか年収や預金、家族状況、個人の悩み、学歴など……がインプットされている。私が知らないところで、私の情報が売り買いされているとはなんとも不快な気持ちになる」◎ 「近い将来、自分の考え方などまでも情報として収集され、他者がその情報を使って、自分を管理・コントロールするようになるのではないかと思った。ジョージ・オーウェルの『1984年』とは違う形だけれども似たような管理社会が出来ると思った」（堀口義貴）プライバシー権を文字通り自分の問題としてうけとめた生徒たちに対して、「もし自分の私事がマス・メディアの手で報道されたら！」と問題を投げかけた。「ロス疑惑」報道をひとり三浦氏個人の問題ではないことを考えさせる伏線として。

〔第2時・報道の自由と人権〕ビデオで三浦和義氏逮捕時の取材陣の状況を視聴させ、三浦氏逮捕直前の手記（朝日ジャーナル、85・9・27号）や、「ロス疑惑」報道のなかで犯人扱いされ名誉棄損の訴訟をおこした他の人の例（朝日、85・10・18付）などによって、過熱報道の実態を示す。メディア側の言い分（TBS、テレビ朝日のプロデューサー）と対比して、報道の自由と人権との関係について細心の配慮を払う欧米ジャーナリストの発言をビデオ（NHK教育テレビ「いま事件報道は

行き過ぎか？」録画)で呈示。たとえば、「マス・コミが裁判官のように裁く資格を誰れが与えたのか」(ジョン・ルイス)。「ロス疑惑報道は商業ベースで展開、他の諸問題とくらべてバランスが崩れている」(バーナード・クリッシャー)など。スウェーデンで犯罪報道の際被疑者が匿名扱いされている具体例(前沢猛「マスコミ報道の責任」三省堂)、被疑者、被告人は判決確定までは無罪と推定されること、被逮捕者の起訴率は6割(日本)だから逮捕された者はイコール真犯人ではないこと、マス・コミの人権配慮を心配する世論動向(朝日、85・10・16)を示す。雑誌・新聞の販売収入、放送会社の視聴率競争と広告収入依存の資料によって、情報の商品化について考えさせる。アグネス・チャン(歌手)の意見「芸能ニュースとちゃんとしたジャーナリズムが分かれていたはずなのに、最近は大ブってきたみたい。テレビでも、ニュースや報道番組はカネもうけの材料ではなかったのに、今は報道そのものがエンターテインメント(娯楽)にされちゃった」(朝日、85・10・14)を紹介する。

〔第3時・人格権(名誉・プライバシー権)保護のために〕匿名報道の必要性(雑誌「世界」1981年11月号座談会)、メディア側のチェック機構(マスコミ倫理懇談会、プレス・オンブズマン制度(前沢猛、前掲書)、情報社会のプライバシー保護立法をとりあげる。

〈評価の観点〉人格権の現状と保護の重要性を、自己の主体にかかわる問題として、同時に情報社会の課題として認識し、社会認識と自己認識を相乗的に発展・深化させたか。

〈授業法についての生徒の感想〉

⑤ 「三回にわたっ

てプライバシー問題について勉強したが、VTRなどを利用したため、とてもわかりやすく、まだ三浦さんという題材自体が今話題をよんでいることなので、授業は



親しみやすかった。三回を通して一番考えたことは、やはり現在のマス・コミのあり方、また視聴者のあり方である。……人間にはそれぞれ人権というものがある。その重要性を再認識する必要があると思った』(橋本恵)。⑤ 「今回の授業で感じたことは、自分がわかっていることがテーマとなっていたので学習しやすかったということです。一生懸命きいていても、自分に興味や関心がなかったり、それについての知識がないと、やはり考えるということがおろそかになってしまうし、それに理解しにくいと思いました。そういった意味で今回の学習法・テーマなど私は大賛成です。これからもそういった授業があるとよいと思います。」(白竹桃代)。

“「現代社会」私の試み”

都立四谷商業高等学校 影山 洋

昨年秋、全倫研の大会に初めて参加し、勉強不足でかつ、経験の浅い私のもとにこのたび、「現代社会」私の試みといった執筆依頼を頂いて、実際どのように、何を書いて良いのかわからない。が、これも自分への一つの勉強になると思い、恥かしながら、自分の授業実践を紹介し、これからの自分の授業の反省、研究材料にしたいと思う。

まず、私の勤務する学校から紹介したいが、勤務校は都のほぼ中心に位置する商業高校である。職業高校だからかも知れないが、思うことは、社会科に限らず、普通科科目すべてにおいて、基礎的、基本的知識に欠けているようである。したがって、授業としては用語説明的な授業が重要となってくるが、生徒の興味、関心に沿うよう工夫、努力が必要となってくる。

私は現在、週二単位の授業を教科書（東京書籍、改訂現代社会）に沿って行っているが、今のところ、第一章、現代社会の基本的問題の中の政治・経済的分野が中心である。それでは、今まで教えたものの中で、私が試みたことをこの中から例をあげて示していきたい。

私が現代社会の授業の中で試みていることは、月並かも知れないが、まず第一に視聴覚の工夫によって生徒に意欲をもたせる。ということと、第二に生徒に意外と思わせる事実を発見させることという二つである。これらのことがらは、昨秋の全倫研大会でもその重要性を語られている先生方がおられたことを記憶しているが、ではその実践方法について次に述べたいと思う。

私は、勤務校の生徒達の基本的、基礎的な知識が欠けているといったが、その尺度を計るために、授業前に簡単なアンケートを施したことがある。このアンケートには、これから授業で習う事項（例えば“円高、円安”，“OPEC”など）が書き出してあって、それらの項目に対して、①よく知っている。②聞いたことがある。③まったく知らない。といった三つの選択枝を与え、教えているクラス全部の生徒に対して行った。ここで私が知りたかったのは、名前は聞いたことがあっても、意味を明確にいえるかどうか、ということだったが、アンケート結果では、予想以上にすべての項目に対して、②と③の回答が集中し、①を答えられる項目はわずかであった。また、①と答えた項目であっても、生徒は意外に誤った知識を常識としてとらえているということが、私自身、授業を通してみてわかった。

例えば、この例としては「円高、円安」という項目があげられる。生徒たちは、この項目に対し、①と②の回答が多かったが、授業でいざ、1ドル=200円と250円を比べてみた際の「円高、円安」を聞いてみると、逆として覚えていたものが大半であった。これは、字をそのまま受けとめてしまい、1ドルが200円から250円になったから円高なのだと考えてしまうのだが、実際これが違うことだと教わって、意外だと感じた生徒達がかかりいたと思う。

このように、私は、生徒があやふやに知っている項目、あるいは知っていると思っても実際誤っている項目を選びながら、生徒に意外性をもたせ、新しい事実を発見させることを試みている。

次に、私の試みている視聴覚への工夫であるが、私が実際に授業を通して痛感するのは、生徒達の社会に対する興味の低さである。生徒達は、いづれは考えていかねばならない身近な問題に対しても、教科書にあるように活字として教えると、すぐソッポを向いてしまう。そのために、様々な視聴覚への工夫が必要となってくるわけだが、私の場合、未だ模索中である。現在よく使われるようになったビデオなどの授業もしてみたいが、私はもっぱら黒板に絵を書くなどしての視聴覚の工夫を実験的に試みている。

例えば、「宇宙船地球号」という項目を教えるのに、私は地球の絵と宇宙船の絵を交互に描き、生徒達に、どうして地球が宇宙船なのかということを考えさせたことがある。実際、生徒達から明確な答えを引き出すまでには至らなかったが、反応は大変良く、この項目から発展する資源、エネルギー、人口、や環境といった問題に対するレディネスにもなったとも思う。

こういった意味で、私は、何か項目として絵で教える方が効果的と思える場合にこの方法を用いているが、より改善できる方向を絶えず探しているのが現状である。

この他に、以上の二つの試みを行ううえで、私は、夏休みに生徒達に「現代社会と私」という題でほぼ自由に作文を書かせた。これについても少し紹介しておくと、生徒達はこの漠然とした題に対して、頭を悩ませたようだが、時期的にインパクトの強かった、「日航機事故」、「アフリカの飢餓問題」、「いじめ」等といったテーマが目立った。この作文によって、最も収穫となったのは、今度は生徒の方から私に意外なことを数多く教えられるということだった。作文もより改善してこれからも続けていきたい。

以上、「私の試み」を示してきたが、前述の通り、まだ私は勉強を始めたばかりであって、生徒達により良く教える方法を手探りしている状態である。これからも数多くの先生の授業の交流を持つなどして、私は「私の試み」を早く自分のものにしたと願っている。

事務局だより

豊島高校 葦名次夫

「着実に学び、その日々の授業と生徒指導に生かす研究会を」— 先輩の先生方が培ってきた都倫研の気風を少しでも実りあるものにと、60年度の研究会活動はスタートしました。

黄昏迫る午後6時から、校務を終え三々五々集い、読書会をはじめ教材研究、生徒指導の探究に熱心に取り組む“都倫研の華・分科会活動”。本年度は、三分科会延べ14回・100人を超える方が参加されました。分科会活動の拠り所となった新宿高校同窓会館での学びの集いには、酒井会長が常に参加され、その後の「trinken」の宴では人生・教育談議に花を咲かせ、終電車間際に帰路につくことがたびたびでした。参加された先生方の熱意と共に、黙々と会の運営に配慮された世話人と研究部の先生方の御尽力なしには実現しえなかったことだと思います。

20数余年、研究授業・研究発表・講演の三本の柱を灯として掲げ続けてきた研究例会。何とか遣り繰りして駆けつけて下さる姿と「御苦労さん」の一言に、事務局一同どれだけ励まされることか。本年度は、新しい顔も多くみられ、総会も含め参加者が延べ200人を超えました。懇親会の席にまで配慮され、快く公開授業を引き受けられた井上、富塚、細谷三先生はじめ、研究発表いただいた諸先生に感謝を捧げる次第です。

一方、新教育課程4年目が過ぎゆく中で、研究会活動は様々な課題を抱えています。全国的に「倫理」が設置されている割合は、残念ながら少なくなっているようです。「現代社会」でも、“現代に生きる倫理”の内容の教材化を工夫する余地はまだまだ多く残されています。「現代社会」の内容は広くバラエティーに富み、その分、新しい試みや取組がみられるようになってきましたが、教科の土台となる基本的考え方や方法論が確実に深まり広がってきてるとは、必ずしもいえません。大学入試での取り扱いや新しい教育課程の編成について、大きな変化がこれからも予想されるでしょう。

このような状況の中で、研究会活動をどう進めていったらよいか、分科会や事務局の合宿で討論を重ね、模索してきました。しかし、まだまだ、はっきりとした方向づけを見出しかねている—ということが偽らざる感想です。

しかし、次のことは、確信をもっていえるのではないのでしょうか。それは、都倫研は、創立以来、生徒の意識と価値観に切りこみながら、よりよく生きる人間形成の教育を一貫してはっきり主張し続けてきた研究会であり、互いに学びあい、地道に研鑽を積み重ね、そのテーマを探究し続けてきたという事実です。それが、私達の研究会の誇りであり、活発な活動を支えたエネルギーの源であったと思います。そして、子供がいて、生徒があつての授業であり学校であるならば、その高校生の生活と意識をしっかりとらえ、"流行の中の不易を求めて、青年期における人間教育とは何かを真剣に考えていこう"と思います。61年度は、このテーマにさらに着実に取組んでいきたいと思います。

本年度は、事務局の世代交代が進み、20代後半から30代を中心とする"若い事務局"が誕生しました。疲れた体を厭わず駆けつけて下さる献身的な事務局の先生方に支えられ、ここまで歩んでこられたというのが実感です。また、迷い、困った時に、知恵をしばって助けていただいた中村新吉先生、海野省治先生はじめ先輩の先生方に、人の情のありがたさを学びました。最後に、求道的ともいえる姿勢と緻密な心配りで、教育に携ることの意味を教えて下さった前事務局長の蛭田先生、夜遅くの分科会にまで加われ、私たちをさりげなく暖かく抱え、励まし導いていただいた酒井先生ありがとうございました。

あ と が き

本年度は「現代社会」が新科目として発足してから4年目を迎えることになりました。過去3年間の具体的な授業の積み重ねの中で、「現代社会」の科目としての理念や指導内容などが、しだいに定着してまいりました。そこで、「現代社会」の授業をさらに深めていくために、「現代に生きる課題を探究させる指導方法の研究」という研究主題を掲げて、各分科会の活動を進めてきました。各分科会とも、世話人になっていただいた先生方と研究部が一体となって、6月から3月まで開いてきましたが、本年度は、特に、世話人の先生方の御努力によって、3分科会で合計14回の勉強会をもつことができました。また、ご出席いただいた先生方の延べ人数も120名を越えるという盛況ぶりでした。毎日の学校での勤務を終えられた後に、お集まりいただいて、夜遅くまでレポーターの先生が紹介してくださった書物にもとづいて議論して、研究を深め、そして、それをまた明日からの授業に役立てていく、というのが分科会の魅力ではないかと思われます。本年度からはじめて参加された先生方も、積極的にレポーターをひきうけてくださったことも、分科会を盛り上げていく原動力であったと思います。そして、この分科会からさらに研究例会での研究発表へと発展していった例もありました。このように、都倫研の研究活動のベースである分科会が、このように活発化していることは、将来の都倫研の動向を考えるうえでも、非常に明るいように思われます。これ以後も、ひき続いて活発な分科会が開かれていくことを望みます。

本年度の紀要は、このような都倫研活性化の中での先生方の研究の成果を集大成したものです。原稿をお寄せいただきました先生方には厚くお礼申し上げます。本年度の紀要につきましてのご意見やご感想がございましたら、下記の研究部のスタッフまでご一報いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、分科会の会場として、酒井先生のご尽力により新宿高校の朝陽会館を毎回のように使わせていただきましたことを、感謝の意をこめまして、この場をお借りしてご報告申し上げます。

研究部 三宅幸夫・幸田雅夫・水谷禎憲・富塚 昇

東京都高等学校倫理・社会研究会規約

1. 名称 この会は、東京都高等学校倫理・社会研究会といます。
2. 目的 この会は会員相互によって、高等学校社会科「倫理」「現代社会」教育を振興することを目的とします。
3. 事業 この会は、次の事業を行います。
 - (1) 「倫理」「現代社会」教育の内容および方法などの研究
 - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
 - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
4. 事務局 この会の事務局は原則として会長在任校におきます。
5. 会員 この会の会員は次の通りです。
 - (1) 正会員 学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者
 - (2) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する団体または個人
6. 顧問 この会の顧問をおくことができます。
7. 役員 この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
 - (1) 会長 (1名)
 - (2) 副会長 (若干名)
 - (3) 常任理事 (若干名)
 - (4) 幹事 (若干名)
 - (5) 会計監査 (若干名)
8. 総会 総会は毎年5月に会長が召集し、次のことを行います。
 - (1) 役員を選任
 - (2) 決算の承認、予算の議決
 - (3) その他重要事項の審議
9. 年度 この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終了します。
10. 経費 この会の活動に必要な経費は、会費その他の収入でまかないます。会費は次の通りです。
 - (1) 正員 学校または研究団体を単位として年額 1,800円
 - (2) 賛助会員 年額 1口 2,000円
11. 細則 この会の規約を施行するについて、幹事会は必要な細則を作ること

ができます。

12. 規約の変更 この会の規約は、総会の議決によります。

附 記

-

1. この規約は昭和37年11月20日から施行します。
2. 昭和42年度総会で、会計年度と会費の変更がみとめられた。
3. 昭和55年度総会で、本研究会の名称を「倫理社会」研究会から倫理・社会研究会に変更することがみとめられた。

昭和60年度 都倫研紀要 24

発行 昭和61年3月25日〔非売品〕
発行者 東京都高等学校倫理・社会研究会
代表 酒井俊郎
印刷 (有) 稲谷印刷所
東京都千代田区麴町3-1
電話 (03)234-7851~2
事務局 東京都豊島区千早町4-41
東京都立豊島高等学校
電話 (03)958-0121
発行者 東京都高等学校倫理・社会研究会

